
マーガ

夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マーガ

【Nコード】

N6212X

【作者名】

夜

【あらすじ】

灰岡大輝は金持ちの息子として産まれてしまったがために日々女子に言い寄られる生活にうんざりし、普通の青春を謳歌することを望んでいた。平和な学園生活を送るために偽装の恋人として契約した相手は学園で有名な魔女徒花星羅。彼女は白魔術師であって魔法使いではなく、ましてや魔法少女でもない。二人は不幸を前提に付き合い始めるのだが……

前提は不幸

この学園には魔女がいる。

全校生徒がそれを知っているのは、校長公認の下、様々な特例によつてあまりにも厚かましく存在するからだろう。

あたばせいら
徒花星羅、今年入学したばかりの高校一年生、十五歳だ。

彼女は魔女であつて、魔術師ではあるが、魔法使いではなく、ましてや魔法少女でもない。見た目に反して白魔術が専門であつて黒魔術には決して手を出さないと言う。

魔女の分類など彼らにはわからない。アニメやゲームの世界のよ
うな現実味のない言葉にしか聞こえないはずだ。

だが、箒に跨つて空を飛んだり、釜で怪しい色の液体を煮たり、杖を持っていたりしていることもない。しわくちやの顔でもなければ、鉤鼻でもない。三角の帽子を被っていないければ、マントを羽織つているわけでもない。

誰もが想像するような魔女と彼女の言う魔女は異なっている。

風貌は決して普通だとは言いつてもいいところもあるのだが、美少女と言つてまず問題はないだろう。

眉のあたりで一直線に切り揃えられた前髪とサイドを顎の辺りで切つたいわゆる姫カットで、いつも黒いフードのついたケープをしている。これが帽子とマントの代わりだと言えなくもない。

成績は極めて優秀、入学式で新入生代表挨拶を頼まれるほどで、先日の中間テストでもトップに名を連ねていた。

頭脳明晰、容姿端麗、本人にそれを鼻にかけた様子はないが、あまりに異質なために敬遠されがちである。

問題は彼女自身よりも、連れている黒猫の方なのかもしれない。

胸元に白い毛があり、厳密には真っ黒ではないその猫は水色と金

ともとれる茶色のオッドアイを持ち、実に神秘的だ。

だが、このノスフェラトゥが本当に不気味なのだ。

そもそも、ノスフェラトゥ（吸血鬼の総称）という名前が不気味であって、普段はほとんど鳴かないが、目を合わせて鳴かれたら不幸が訪れるという噂だ。

実際、興味本位でノスフェラトゥに近付き、悪戯をしようとした人間は自身や身内に悪いことが起きたと言っている。

偶然ともとれるが、それについては星羅自身が証明しているとも言える。

そもそも、普通ならば校舎の中に猫がいるはずなどないのだが、それが許されるには深い理由があるのだ。

未だに嫌がる教師もいるが、特例として認められてしまっている。初めは誰もが校内に猫などいてはならないとノスフェラトゥを追い出そうと躍起になったのだ。

しかし、暴れるノスフェラトゥを無理矢理学校の外に出したその日、星羅は大怪我をしそうになった。

廊下を歩いていたところ、ボールが飛んできて窓ガラスが割れ、彼女はそれを浴びる形になった。

その一度だけではない。廊下でふざけていた生徒が飛ばした上履きで蛍光灯が割れ、真下には彼女がいたが、彼女はフードのおかげで無事だったと言える。

花瓶が落ちてきたことや階段で人とぶつかって落ちそうになったこともある。

そういうことがノスフェラトゥを追い出した時に限って起こるのだ。ノスフェラトゥが意味ありげに鳴いた時に。

このまま校内で事故が頻繁に起こるのは学園側としては困ることだ。それは猫が校内にいることよりも問題だと判断された。結局、ノスフェラトゥは特別に校舎に入ってもいいことになった。

ノスフェラトゥ自体は悪戯をするわけでもなく、気ままに校内を歩き回る程度の大人しい猫で、校長が餌をやっている姿が何人もの

生徒に目撃されているという話もある。

今やノスフェラトゥも生徒だというのが学園七不思議や都市伝説のように囁かれているが、本当に学生証を持っているというのが冗談みたいな本当の話だ。入学テストを受けて合格したという噂もあるが、真実は定かではない。

だが、そんなことはどうだっていいのだ。

その魔女、徒花星羅が今、彼の目の前にいる。

こうして近くで見ると彼女の佇まいは凜としている。大きな目には不安も期待もない。人形のようにも見える。

そして、彼は口を開いた。

「俺と付き合ってほしい。不幸を前提に」

それが始まりの言葉だった。

灰岡大輝^{はいおかたいき}、十六歳、高校二年生。

容姿は、よく格好いいと言われるが、大方取り入るためのお世辞だと思っっている。誰も本当の意味で自分を見ていないと常々感じている。

自己評価は普通、悪くはないだろうという程度だ。それを悲観することは無い。体型にも特にコンプレックスがあるわけでもなく、卑屈になる理由が思い当たらない。

運動は特別できるといっわけではないが、勉強では努力によって何とか常に上位を保っている。努力のない結果などありえなかった。悩みなんてないだろう、と誰もが言う。何もかも恵まれていて不自由がなさそうで羨ましいと笑う。

だから、誰にも理解されない大きな、大きすぎる悩みがある。それはとても厄介なものでまず解決は不可能だという代物だった。

諦めるべきだとわかつてはいるが、諦め切れない。諦めたら心が死んでしまうような気がする。大袈裟だが、この先の全てを支配する悩みなのだ。

はぁ、と溜息を吐けば背中をバシッと叩かれる。

「何だよ何だよ、いい男が溜息吐きやがって」

カラカラと隣で笑うのは親友の羽佐間拓臣^{はつまたたくみ}だ。

いつも彼は明るい。それが大輝には羨ましかった。こうなれたら……と憧れすら抱いている。

浅黒いのは元々らしいが、いかにも体育会系で、精悍な顔立ちをした彼は自分よりずっと格好いいと思っっていた。

「溜息吐いた数だけいい男じゃなくならないかな……」

「よし、じゃあ、俺にかける！ 代わりに俺がめちゃくちやいい男になっってやる！ って、違っただろ！」

拓臣はまるで寺で煙を頭にかけるように、手を動かしてみせる。

「お前は十分にいい男だよ。これ以上なる必要ない」

「そうだった」

思い出したように言うその嫌みのなさが大輝は好きだ。

しかしながら、それによって悩みがどこかへ飛んで消えてくれるわけではない。切り離せないものだとわかつている。

「で、何だよ？」

「……女子が、うざい」

さすがにはつきりとは言いにくくて、小声になる。いくらここが屋上で、他に誰も聞く人間がいないとしても。

そして、今までに何度も言ってきたことでもあるが、拓臣が大袈裟な反応を示す。その内芸人を目指したりするのではないかと大輝は思う。

「うっわ、言いやがったよ。モテる男は辛いよ発言！ 毎度毎度、それを聞かされる俺の身にもなれよなー」

拓臣もモテるのだが、彼に言わせれば『モテ方が違う！』ということらしい。

尤も、大輝にはよくわからないし、彼のその反応もノリであって、本気ではない。彼の本気は見えにくいところにある。

「だから、代わってくれって言ってるだろ？ 全部引き受けてくれよ、マジで」

拓臣に寄り付く女子はまともだと大輝は思っている。拓臣が言うには「女なんて大して変わりない」だが、絶対違うと思っている。

自分のところに来る女子は恐ろしくて仕方がないのだ。

「そりゃあ、三年のマドンナと名高いミドリ先輩まで来た時には心底代わってほしいと思ったけどなあ……代われるわけねえんだよ！」

最早、全ての男子を敵に回してしまったような気分ではあるが、拓臣だけは味方でいてくれる。

「俺、もう、やだ。この生活」

こんな弱音を吐ける相手も拓臣だけだった。彼には何でも言える。

数ヶ月の差とは言っても既に一つ年上で、そのせいか昔から兄のよう
に思うことがあった。大輝は一人っ子で、拓臣が三兄弟の長男で
あることも関係しているのかもしれない。

「そうやって、もう一年はやり過ぎたじゃねえか。大丈夫だって
このまま、あと二年いけるいける！」

「大丈夫じゃない。もうやだもうやだ！」

大輝は膝を抱えた。子供っぽいとは自分でも思う。それでも、自
分に降り懸かった運命から目を逸らしたかった。

「大っ体、お前は真面目すぎんだよ。いい男つてのは、ちよいちよ
いつまみ食いをしてだな、青春を謳歌して……」

「嫌なんだ！ どうせ、好きな子ができて付き合つて将来結婚する
約束したつてな、大いなる力で引き裂かれるんだぞ！？ 夏休みな
んか既に悲惨な予定が決まつてて、楽しみにする要素がないんだぞ
！？ 別荘なんて爆発すればいいんだ……ううっ、俺の青春はどこ
に行つたんだ……」

親身になつてくれるとは言つても、所詮他人事でしかない。それ
を楽しんでいる部分があることを彼も否定できないだろう。

それに拓臣は恐ろしく要領がよく、樂觀的であり、それは真似で
きそうもない。

「大袈裟な……親が決めた結婚相手がいるつてだけじゃねえか」

「……それが大問題だつてわかつてるだろ？」

拓臣はさらりと言うが、大輝にとつては認めたくない事実だつた。
できることならば、全力で消去したい。

「世の中の男共は全力でお前を呪い殺そうとするんじゃないかな？
顔はまあまあイケメン、金があつて、将来結婚を誓い合つた超美
人がいて、将来薔薇色だつて、みんな言つてるぜ？ 何を悩むんだ
つて」

「顔は生まれつきだし、金は俺のじゃねえし、俺が誓つたわけじゃ
ねえし、彼女は……俺の中では超美人じゃない。はつきり言つて好
みじゃない」

そんなことを言っただけでも罰が当たるとは思う。けれど、それならば、婚約が破談になるというものであつてほしい。それも、親には何の迷惑もかからないという自分に都合のいい形で。そんなことはあり得ないとわかつてはいるのだが。

「この贅沢野郎っ！ 清女の市原菜希せいはなつて言つたら、この辺で知らねえ奴はいねえっていうお嬢だぞ！ 今年のミス清麗は間違いなしとまで言われてる」

清女 清麗女学園、男子ならば誰もが憧れる女子校であり、その制服の可愛さから入学を熱望する女子も多い。その男女ともが憧憬を抱く学校において一番の有名人であるのが市原菜希である。

「お前が言つなよ。寒くなる」

そのミス清麗も一生疑惑が付き纏い、それでいて誰も暴けないだろうと思えばぞつとして、思わず自分の腕を撫でる。

拓臣もまた彼女を他と同じようには見ていないことを大輝は知っている。

その昔、同じ学校に通っていたと言うのだ。大輝と出会うよりも前、幼い頃のことだと言うが、家族の付き合いは未だ切れないらしい。

つまり、彼もまたそれなりのお坊っちゃんということになるのである。

だが、昔と変わりにないという彼女のことを拓臣が褒めることはない。

「俺は他の男子の気持ちを代弁してやつてるだけだ。清女だぞ？」

「どんだけの男子がお近付きになりたいと思つてると……」

「だから、お前が言つなよ。本当に白々しいから」

市原菜希に関係なく、彼は皆が憧れる清女の生徒との合コンをセッティングできるのだ。皆が『女のことなら羽佐間に聞け』と言うほどである。

真にルックスが良くて何一つ不自由していないのは拓臣の方ではないかと大輝は思わずにいられない。

「そりゃあ、お前が憂鬱になるのはわかってるけどよ……俺からは
気の毒としか言えねえ。他の言葉はねえよ」

協力できるものならしたい、と何度も彼は言った。そこに偽りが
あるとは思わない。どうにもできないのが現実なのだ。

神頼みをしても状況は全く改善されない。より悪い方向へ着々と
進んでいるようにしか思えない。

「いつそ、好きな子作って駆け落ちしたらどうだ？」

「地の果てまで追っかけ回されそうだ。昔、家出した時、腕にGPSのチップ埋め込まれそうになったって言っただろ？ あれ、成人したらマジで入れるって言われてるんだ。どれだけ俺信用ないんだろっ……」

「どこまでも二人で逃げ切って……って、無理だよなあ。現実的じゃねえよな。映画じゃあるまいし、全然リアルじゃねえ。そこまでお前についていくような度胸のある女がいるかも怪しいよな」

何て非現実的な話なのだろうか。けれど、それがどうしようもない現実だ。

親にさえ信用されていない自分が嫌になる。

「だから、諦めた。せめて、それまで平和に普通に学園生活送りたいのに、毎日毎日女子に遊びに誘われて……俺の身体が持たないって」

婚約のことは拓臣ぐらいにしか言っていない。言ってしまうえば楽なのだろうが、それはそれで面倒なことになる。何よりも大輝自身が認めたくないのだ。

たとえば、彼女が本気で好きな男を見付けてくれれば大輝との縁談はなかったことになるはずだが、その気配もなければ女子高では望みも薄い。

「じゃあ、誰か一人犠牲にしるよ」

「は？」

親友の口から出た物騒な言葉に大輝は顔を顰めた。聞き間違いだと思いたかった。

「犠牲だ、ぎ・せ・い。生贄、スケープ・ゴート、人身御供、わかるか？」

間違いでないばかりか余計に怖くなってしまった。

「先輩とか同級生に抵抗があるなら、後輩でいいじゃねえか」

何てことを言うのだろう。まだ後輩までには知れ渡ってないとしても時間の問題だ。去年、全学年に知れ渡ったスピードは彼も知っているだろう。

「前に試しに付き合ってみただけど、結局、金だし。身体だけの関係でいいとか言われるし、何か散々ないこと言いふらされるし……」

大輝は既に懲りている。せめて短い間でも一緒にいる人間を探すなど相手にとっては失礼な話で、その代償は小さいものではなかった。

「そりゃあ、お前の女を見る目がないってこった」

家庭環境のせいでもともな恋愛はできなかった。

拓臣のように要領が良くないのだ。だから、養えるものも養えない。

「それに、付き合っくんじゃねえんだよ。フリをするんだ。ちゃんとした契約を結んで盾にするんだよ。そうすりゃ言い寄ってくる女共も少しはましになるかもしれねえ」

「契約？」

「これまた物騒な響きだ。書面を用意する必要があるのだろうか、大輝は首を傾げる。どんどん現実味がなくなっていく気がする。

「絶対にお前を好きにならないような女子を選んだよ。それで、そいつが他の女子から何されよう……」

「サイテーだな、拓臣」

誰かを犠牲にすること、彼の提案の意味を理解して大輝は溜息を吐く。そんなことできるはずがない。

拓臣にもできるとは思わないが、大輝にはもっと無理だ。

「平和にお前だけが救われる道は絶対にねえってこった。お前の普通の青春には犠牲が必要だってことだ」

それも認めたくない。複雑な心境だった。

「じゃあ、たとえば、誰がいる？」

聞くだけは害ではないと大輝は聞いてみる。

「……いねえな。俺もそこまでリサーチしてねえ」

「それじゃダメじゃん」

拓臣にも明確な考えがあったわけではないようだ。

「大体、真面目なお前が食い付くとも思わなかったし」

「どうやら冗談のつもりだったらしい。単に諦めさせるための、初めから実行不可能な提案のつもりだったのだろう。」

「……いるとして、そいつだけはやめた方がいい」

「誰だよ？」

「この話は終わりな。諦めろってことだ」

もうこの話は終わりにしたい。拓臣の表情にはそれが滲み出ている。

続けることで、大輝が何かに行き着くのを拒むかのように。その話をしたことを後悔するかのよう。

「あ、徒花さん！」

不意に思い浮かんだ名前だった。

「ああ？」

拓臣の表情は険しい。まるで自分の悪口を言われたかのような反応にも見える。

「徒花さんって、みんな噂してるだろ？」

「頭のおかしい魔女っ子だ」

拓臣は吐き捨てる。明らかな軽蔑が込められている。

「頭はいいって聞いた」

「勉強ができるのとはまた別だろ」

「一回相談してみようかな……」

徒花星羅は魔女であり、その魔女とは他人からの相談を受けるものであると聞いていた。助言を授けてくれるものであると。

「やめとけやめとけ、あの女はイカレてる類だ」

本気で嫌がっている素振りに大輝は怪訝に思う。

「徒花さんと知り合い？」

不本意な知り合いを敬遠するようなニュアンスが感じられたから

こそ、大輝は聞いてみる。

彼の交友関係は幅広く、特に女友達は妙に多いという認識だ。そこに後輩の徒花星羅が入っていても何ら不思議ではない。

「いや、噂で聞いたただだが、お前よりは知ってるさ」

彼のネットワークには着々と情報が集まっているようだ。

けれど、大輝は自分が見て聞いた物を信じたい。それは拓臣を信用していないということではない。

「廊下で見かけたけど、何か上品だし」

「上品か？ あれが？」

「背筋が真っ直ぐで、髪の毛もあれだけ長いのにボサボサって感じじゃないし、きつと手入れが大変なんだろうな……」

「あのな、お前は女を背筋や髪で決めるのか？」

「そうじゃないけど……」

大輝は口ごもるしかなかった。今の拓臣には何を言っても無駄そうだ。

「洗脳されんのが落ちだって。俺はそんなお前見たくない」

拓臣の気持ちが変わらないわけでもない。

逆の立場であつたら、素直に行かせなかつただろう。

「いや、でも、やらないよりはましだ！」

もう大輝は心に決めていた。悲観するのは徒花星羅に会ってからにしよう。それからでも遅くない。嘆くのはいつでもできる。

「……俺はお前の親友だ」

「うん、いつも感謝してる」

どれほど拓臣に助けられてきたか、わからないほどだ。頼りっぱなしなのかもしれない。感謝してもしきれない。

「でも、身の危険を感じたら逃げる」

「うん、そうしてくれ」

そこに危険があるならば真っ先に逃げて欲しいというのが大輝の願いである。

「俺は我が身が可愛い」

「そりゃあそうだろう」

大輝も拓臣の性格は理解しているつもりだ。

こうして、いつもいつも愚痴を聞かせてすまないと思っている。

彼のストレスは合コンなどできちんと発散されているらしいのだが、それでも申し訳ない。

「そして、我が身の次はお前じゃなくて女だ」

「……うん」

それもわかっている。そう言いつつ、大輝のことを優先してくれるのだが、今回ばかりは期待しない。

「わかってるならいい。だが、気を付けろよ。何があってもあの猫にだけは絶対に手出すなよ」

「さんきゅ、拓臣」

何だかんだ言いながらアドバイスをしてくれる彼は真の親友だと思つと胸が熱くなる。自分は本当にいい友達に巡り会えたと思うのだ。

大輝は廊下を小走りに進んでいた。放課後、とにかく早く彼女を捕まえようと急いでいる。

教室に寄ってみたところ、彼女のクラスは既にホームルームが終わって閑散としていた。こういう時、担任の話の長さが恨めしくなる。

彼女がいればすぐにわかるのだが、その姿はなく、代わりに残ってお喋りを楽しんでいた女子に見付かってしまい、逃げるはめになったのだ。

なぜ、こうも自分はモテてしまうのか。甚だ疑問である。

後輩だと言っても携帯電話を片手に迫ってくる様は全学年共通だと思ひ知る。

本人には全く理解できないことだが、なぜか大輝のアドレスを手に入れることがステータスになっているらしい。大輝と繋がることで玉の輿的な他の出会いがあると思っている人間もいるくらいだ。

しかしながら、大輝はそれほど社交的な人間でもなく、知り合いの中で思い付く金持ちのイケメンと言えば、拓臣だけであり、交友関係は至って普通である。

徒花星羅の放課後の居場所は決まっているのだが、絶対とは言い切れない。だからこそ、教室で捕まえようと思ったのだが、それが大間違いだった。

こんなことになるなら自分に運があることを祈って直行すれば良かったのだ。

渡り廊下を過ぎた頃には追っ手を撒くことができている。

皆、わかっているのだ。この先は危険だと。放課後に漂う異様な空気に戸惑いに足を止めてしまう。

大輝が目指すは通称《分室》ただ一つだが、この二棟にはいくつ

かの部が部室として使用している教室がある。

家庭科部、茶道部、書道部、化学部、軽音楽部、音楽部、演劇部
その全てが濃いと言われている。どこも独特の、強烈な個性を持つ
ていて、数々の名物部長の顔を思い浮かべると大輝もこれ以上進み
たくなる。

放課後の二棟は魔窟と化すと言われているほどだ。これも、おそ
らく七つよりも多い学園の不思議だが、紛れもない事実だと大輝は
二年目にして思う。

目的地はそのまっただ中、生徒会室の隣にある。
生徒会もまた面倒な人間が揃っているからこそ進みたくなくなる。
一番濃いのは生徒会に違いないのだから。

奇声が聞こえる教室を過ぎると、その隣に《保健室 分室》の文
字が見えてくる。こここそが徒花星羅の居城とも言われる教室であ
る。

前後のドアにある窓には紙が貼り付けられ、中が覗けないようにな
っている。相談者のプライバシーを守るためだろうか。

そして、《相談受付中》という表示がされている。
ほっとして、大輝がノックをしようとした瞬間、ガラリと扉が開
き、中から少女が出てくる。

「あら？」

少し驚いたように彼女は首を傾げる。

「えっと……徒花さんだよね？」

「ええ、そうよ。いかにも、あたくしが徒花星羅だわ」

頷く彼女は確かに徒花星羅だ。確認するまでもなかった。

「相談したいことがあって……」

「あたくしは誰の相談でも受けるわ。どうぞ、中でお待ちになっ
て」

スツと中指を示すと彼女はすぐに隣の生徒会室へ入っていく。
何か用事だろうかと思いつつ、大輝は室内に入ってみる。

お待ちになつて、と言われても困るものがある。手持ち無沙汰で、大輝は室内を見回す。

ここが学園内教室の一つにすぎないとわかつていても、女の子の部屋を物色するような後ろめたさがある。

だが、ガラソとしていてという印象が強い。四十人分の机と椅子が並べられる教室の中奥には向き合う二組の机と椅子が置かれている。尤も、テーブルクロスがかけられ、クッションまで乗せられている有様なのだが。

なぜか、隅の方には猫のトイレや玩具などが転がっている。

ノスフェラトウ専用なのだろうが、その姿はない。廊下側の壁には特別に運び込まれたと思われる棚があり、中には本や茶器が入れられているようだ。

「ご丁寧に喫茶コーナーまである。」

「そちらにお座りになつて良かったのに」

少しして戻つてきた星羅は籠を抱えていた。

中央の席に大輝を促し、二つの机の真ん中にそれを置く。中には飴やクッキーやチョコレートと駄菓子類が入っている。

「三木一樹みきがすきがお菓子を下さると言うから行つてきたの、好きな物をお食べになつて。どうぞ、遠慮なく」

三木一樹、大輝でも知っている人物だ。生徒会長であり、濃いキヤラの代表格とも言える。むしろ、諸悪の根源と言いつけるくらいだ。

名前を口にするのも恐ろしいという人物もいるほどだが、彼女は平然とフルネームを口に出している。彼女は誰にでも変わらない態度で接するのだろう。

「あ、ありがとう……」

礼を言うものの、菓子を食べたい気分ではなかった。

「今、お茶をご用意するわ」

「待つて」

ぴたりと星羅が動きを止める。

「座つてくれるかな？」

焦っているのかもしれない。大輝自身感じていることだった。

喉は渴いているのに、お茶を待つ間さえ惜しい。

それでも、星羅は何も言わず、向かいの椅子に座った。

じっと見つめてくる彼女は、その目で何を見ようとしていたのだろうか。

そして、彼女が何かを言う前に、大輝は口を開いた。

「俺と付き合つてほしい。不幸を前提に」

待つている間、それよりも前から言うことは考えていた。何十回も心の中で繰り返してシミュレーション済みだった。

それなのに、口から出たのは全く違ふ言葉だった。

「不幸？」

星羅は黙つて座つてしていると人形のようにだったが、その滑らかだったはずの眉間に僅かに皺が寄る。

さすがの《魔女》も訝しがっているようだ。

「事情があつて君を幸せにしてあげられないけれど、俺を助けてほしい」

言葉はまるで自分の物ではないようにスラスラと出てくる。

そして、星羅は身を乗り出して、顔を近付けてくる。

「徒花さん？」

彼女はじーっと見つめてくる。食い入るように、穴が開くほどに。どれだけそうしていただろうか。ふつと星羅が力を抜き、背もたれに身体を預ける。

「……あなたの未来があたくしには見えないわ」

「え……？」

大輝は真剣であつて、星羅もそれを理解して同じように真面目に相談に乗ろうとしているようだった。

もしかしたら、彼女は冗談が通用しない類の人間なのかもしれなかったが。

「何も見えない。こんなことって初めて。いいえ、あたくしが自分の未来を占えないのと同じだね。あなた、何か黒い運命に飲まれている」

困惑しているようにも見える。今までになかったことに遭遇すれば誰だってそうなるだろう。

「自分のことは占えないの？」

「ええ、あたくしは幸せになってはいけないのよ」

だから、彼女は猫がいない時、危険な目に遭うのかと納得してしまっ。

「……あなた、お名前は？」

「あ、ごめん。灰岡大輝、二年A組」

「灰岡大輝……灰岡大輝……」

星羅は反芻し、立ち上がると教室の隅へと歩いて行く。じっと見下ろして、それから大輝を見る。

「灰岡大輝、ちょっとこちらにきてくださる？」

呼ばれて、大輝は素直に応じる。彼女が指さすのは、床に散乱したカードである。それぞれひらがなが一字書かれている。

「これ……？」

「ここを見て」

促されて注目したのは少し離れたところにある六枚だ。十字に並べられているようだ。

問題は形ではなく、並べられている文字だろう。

「かおい……」

「逆よ」

「あつ……」

横に並んだ四枚は『はいおか』と読める。そして、『い』の上下にも『た』と『き』のカードがある。

つまり、その六枚で『はいおかたいき』と表しているのだ。

「これって、もしかして、予言とか……？」

大輝が見ている前で彼女はそれに触れていない。

「ノスフェラトウのダイニングメッセージね」

至極真面目に彼女は言っているように見えた。

「あ、あの猫死んじゃったの……？」

ビクビクしながら問う。彼女がそんな冗談を言うとは思っていなかったのだが

「うわっ！」

突如、黒い塊が飛び込んできて、大輝は尻餅をつく。

それは大輝の目の前に着地したかと思うとまた飛び上がる。

一体、何だと星羅を見れば彼女は黒い塊に襲われているところであつた。

「ノスフェラトウ、やめなさい！」

「えっ、猫死んだんじゃ……」

「これが死ぬわけなっ……痛いじゃないの！」

飼い猫に噛みつかれ、引っかかかかっている星羅は小さな子供のようにも見える。飼い慣らしているとは言い難い。

「まったく、地獄耳でユーモアがわからない猫だわ」

傷だらけになった手をさすりながら星羅は毒突く。どうやら思っていたような関係ではないらしい。

「……大丈夫？」

その問いに大輝の存在を思い出したのか、星羅はさつと顔を背ける。照れているようでもある。何となく白皙の頬が赤く染まって見える。

コホンと咳払いして、仲直りしようとするかのように手を差し出す。ノスフェラトウはサッと逃げ、大輝の足下で丸まった。

「……見えないというのもまた運命ね。少なくともノスフェラトゥは予知していたみたいだけれど」

椅子に座って、星羅は呟く。

「今日、調子が悪いとかじゃなくて？」

大輝もまた向かいに座れば、その膝にノスフェラトゥがピョンと飛び乗ってくる。引っ掻いてくるわけでもなく、大人しくしている。その様子を星羅がひどく羨ましげに見ている気がしたが、触れてはいけない話題のように思えた。

こうして生で見ると不思議な猫だ。オッドアイであること以外、その辺りの野良猫と何ら変わりなく見えるが、先程はとんでもない跳躍力を見せてくれたものだ。

ノスフェラトゥがどこからやってきたかと言えば、壁の上部、開いている小窓しかないだろう。

いくら猫の跳躍力が優れているからと言って並の猫になせる芸当ではないはずだ。やはり、何か特別な魔法でもかかった猫なのだろうか。

もしかしたら、本当は猫ではないのかもしれない。そんな馬鹿なことさえ考えてしまう。

「三木一樹は見たのよ」

「それはそれで凄いけど……」

あの傍若無人とも言われる生徒会長三木一樹の未来など見るのも恐ろしいものだ。

その彼女（男のような名前だが、歴とした女である）から籠一杯のお菓子を貰う星羅は一体何者なのだろうか。気になるが、問いかけたところで《魔女》以外の答えが得られるとは思えない。そもそも、一樹のことに触れるのはタブーのように思えてしまう。

「あと、三木一樹の下僕達もいつも通り」

下僕とは他の役員達のことだ。一樹に使われている彼らは不憫だと大輝も常々思っている。

「あたくし、あなたと契約するわ」

その言葉を聞いて大輝はほっとする。だが、安心しきるのはまだ早い。

「いくつか、条件を出させてもらうけどいいかな？」

まだ大輝に都合がいいとは言えない。交渉はこれからだ。

「あたくしも出させていただくわ」

当然そうくるだろうとは思っていた。一方的な契約は強要でしかない。

だが、この少女は無理な要求はしてこないだろうと感じていた。

「一つずつ言っていこうか。フェアになるように」

良好な関係が続けるにはフェアでなければならぬ。

星羅が可愛らしい猫のメモ帳を出すのを見て、大輝は少し待つ。

それから彼女は黒猫が付いたペンを取り出す。

どうやら彼女は猫好きのようで、そう思うとノスフェラトゥに好かれていないのが不憫に感じられる。

「じゃあ、俺から一つ、知り得たことは一切他言しないこと」

「それは当然のことだわ。では、あたくしからも、ここに入出入りするのなら、秘密は厳守すること」

「これは共通事項だね」

サラサラと星羅はメモに書き留めていく。

「じゃあ、一つ、期間は最長で俺が卒業するまで。多分、それよりは短くなるだろうけど、君はそれに従うこと」

「ええ、従うわ」

二年にも及ぶような契約には、さすがに何か言われるのではないかと思っていたが、星羅はすんなりと受け入れた。

「けれど、魔女はあたくしの生業、人生の全て。どんなことがあつ

ても、絶対にやめない。侮辱は絶対に許さないわ」

「しないよ。邪魔もしない。それでいいかな？」

彼女は《魔女》としての活動に支障が出なければ、どうでもいいのかもしれない。

「じゃあ、一つ、俺と付き合うのはフリ、絶対に好きにならないでほしい」

この項目に関しては一番不安があった。正直、女は信用できないというところがある。

「あたくしは誰も好きになれないもの」

「誰かを好きになったことは？」

「いいえ、これから好きになるとも思えないし、なつたところで、あたくしは何も求めないわ。絶対に　この世における絶対という言葉の信頼性は地に墜ちているかもしれないけれど」

目を伏せながら淡々と語る星羅に大輝の胸が痛む。

恋を知らない彼女の、これから知るかもしれない未来を自分が二年分も奪うのは心苦しいものがある。

万が一、彼女が自分を好きになってくれたとしても何もしてあげることができない。今更ながらにこの契約の残酷さを思い知る。

(この子は信用してもいいのかもしれない)

拓臣に言えば根拠のない危険な考えだと一蹴されるかもしれない。それでも、信じてあげたいと思ってしまうのは、女に騙されやすい体質だからということなのか。

拓臣の言葉通り、自分は彼女を犠牲にするのだ。せめて不信は抱かずにいてやりたかった。こうして向き合っている彼女は一人のか弱い少女なのだから。

「あたくしの条件を言っても？」

「ああ、うん、ごめん、話逸らしちゃって」

「当然の権利だわ。あなたは、あたくしを利用するために色々知る必要がある」

物わかりがいい。良すぎるのかもしれない。

淡々と遠慮のない物言いは大輝にとって不快なものでもない。

拓臣は反対していたが、彼女ほどの適任はいないのかもしれない。「ノスフェラトウには決して危害を加えないこと。侮辱もいけないわ。命の保障はできないから」

「うん、どうなるかはよくわかったよ」

シユンと俯いた星羅はノスフェラトウと仲良くしたい気持ちがあ
るのだろう。だが、ノスフェラトウは星羅には全く懐いていないよ
うだ。ただ一緒にいるだけ、あるいは、ノスフェラトウの方が偉い
ようにさえ感じられるほどだ。

なぜ、ノスフェラトウなのかということについて聞くのは今度
にした方がいいのかもしれない。膝に乗られてよく見ている内に気付
いたが、ノスフェラトウはメスであって、かなり不似合いな名前に
思うのだ。

「他にはある？」

「今は思い付かないわ」

「俺も、また何かあったら言うよ。いいね？」

拓臣ならあらかじめ書面を作り、サインまでさせるといふ徹底ぶ
りを見せたかもしれないが、そこまで周到にはなれない。

「秘密は厳守って言ったけど、一人だけ例外がほしい」

「あたくしは構わないわ」

彼女は断らないと、どこかではわかっていた。

「親友の羽佐間拓臣。今度、紹介するよ。君は？」

「敢えて言うなら、三木一樹だわ。彼女はとても鋭いから」

できれば、出てほしくなかった名前だと大輝は心の中で落胆した。
敢えて言わなideくれた方が良かったかもしれない。

最もお関わりになりたくない人間に、こんな形で接近するのは避
けたかった。

ここまでの感じから三木一樹は星羅を可愛がっていると思って間
違いないだろう。生徒会室に呼び寄せて、籠一杯の菓子を与えるほ

どだ。

たとえ、本人が快諾してくれたとしても、不幸が前提の付き合いだ。偽装カプルの証人になってくれなどと頼んだらどうなるかわからない。

しかしながら、後で知られるともっと恐ろしいことになるかもしれない。

最初の恐怖と後々の恐怖、天秤にかけるまでもないことだった。

「隠し立てしないで協力してもらった方が得策かな？」

「彼女を通して見えるものがあるかもしれない」

未来が見えない二人、そう思うと不安がある。見えることが当然ではないが、本来彼女は見えなくて当然なものが見えているのだ。

「俺が一つ年上だからって、遠慮しなくていいから」

彼女を利用することにはまだ引け目があった。彼女が我が儘を言い出した時に困るのは自分だとわかっているのに、強気に出ることはできない。

「してるつもりはないわ」

「それなら、いいんだ」

これから彼女を知っていく必要があるのだろう。

「あたくし、三木一樹を呼んでくるわ」

「えっ……そんな急に……？」

立ち上がった星羅に大輝は慌てた。心の準備が全くできていない。

「善は急げと昔から言うじゃない」

「でも、生徒会長って忙しいんじゃない……」

そんな急に来てくれるはずない。思ったのだが、星羅は足を止めることなく、スタスタと出て行ってしまった。

居たたまれない。

床に正座をして、大輝は今すぐにも逃げ出したいと思っていた。膝の上ではノスフェラトゥが無防備に寝ている。これさえいなければ、これさえいなければ……と思わずにはいられない。

無理に退かせば、星羅のようにバリバリと引っかかれてしまうかもしれない。それも嫌だった。

見上げた先では女子二人による優雅なお茶会が行われている。

どこの教室にもあるような机と椅子にクロスをかけただけのものだが、妙に華やかに見える。

一通り菓子を楽しんで、一樹は大輝を値踏みするように見た。

「噂の御曹司、か」

「あんまりそう言われたくないんですけど……二年の灰岡大輝です」
「うむ」

金持ちの子供が多いと言われるこの学園で灰岡の名は知れ渡ってしまったっている。

そもそも間違いは親に決められたこの学園に入ってしまったことなのかもしれない。もう少しばかり密やかな生活を送りたいというのは贅沢なのだろうか。

「えっと、事情があつて」

言わなければと思うのに、彼女の雰囲気威圧されてしまう。

三木一樹は小柄ながら、武術に長けていると言われる。どんな目に遭わされるか考えるだけでぞつとする。

大輝は完全に萎縮していた。

「あたくし達、お付き合いすることになったみたい」

「みたいじゃなくて、なつたの」

さらりと言い放った星羅に大輝もとっさに付け足す。その瞬間、ガタツと音がする。一樹が椅子ごと動いた音だった。

「せ、星羅に、か、彼氏……！」

口に手を当て、ワナワナと震える一樹に大輝は考える。

このまま歯を食いしばり、目を閉じて頬を差し出すべきか。

だが、一番の問題は肝心なことをまだ言っていないということだ。

「いや、あのですね、その……」

言わなければ、言わなければと思うのに、口がもごもごしてしま
う。

すると、星羅が立ち上がり、一樹にティッシュを差し出す。

そのティッシュも黒猫のぬいぐるみのようなケースに入っている。

「わかってるわかってる。偽装でしょ？ ずびいっ……いや、なん

か一瞬にしてお父さんが乗り移ってさ」

「あなたは三木一樹のままよ」

星羅は冷静だった。冗談がわからないのだろう。

「二人つて付き合い長いんですか？」

「今、何日目だっけ？」

鼻をかんで、一樹は首を傾げる。

「あたくし、三木一樹とは知り合ったばかりなのよ」

「そうそう、お隣に越してきたって感じで」

短い付き合いのようには見えないのだが、一樹は世話好きなのか
もしれない。

「別にあたしは怒んないよ。むしろ、同情してるよ、灰かぶり王子」
シンデレラ

涙と鼻水が治まり、一樹はまた大輝を見る。うんうん、と頷いて
いるが、大輝は首を傾げるしかない。

「いや、俺、そんな風に呼ばれたことないですけど」

「事実上の許嫁いるでしょ？ 清女の市原菜希」

大輝はギクツとした。なぜ、彼女がそれを知っているのか。

「あたし、そっちの方詳しいからさー、うん」

「はあ……」

「君はせめて今だけはその事実を隠して思う存分青春を謳歌したいけど、金目当てのハイエナどもが群がって平和な学園生活どころじゃない。星羅じゃなくてもわかることはあるんだよ」

一樹はニツと笑う。改めて生徒会長の恐ろしさを知る。

彼女もまた金持ち関係の人間なのかもしれない。

「いいんじゃない？ 星羅だつてさ、こんなことがなければ一人つきりで魔女続けてくんじゃよ？」

殴られるのではという危惧は一気に吹き飛んだ。

彼女は噂とは違い、案外話がわかる人間なのかもしれない。

やはり噂とは当てにならないものだ。と大輝はホツとしていた。

「まあ、安心しなよ。あたしが協力してあげる」

何て頼もしいのだろうか、感動すら覚える。これほど理解してもらえるならば、もっと早くに知り合いたかったと思うほどに。

「星羅、わかつてる？ 登下校は一緒。毎日、車だよ」

彼女が言うことは正しいと言えば正しい。言わなければ星羅はわかつていなかったかもしれない。

だが、彼女の情報は間違っているようだ。

「いや、俺、チャリですけど」

ちらりと一樹は目を向けてきたが、すぐに星羅に向き直る。

「お弁当も一緒に食べるの。毎日お重に入った豪華な……」

「基本的に学食ですけど」

遮って言えば、ぴたりと一樹が止まる。ここは最早情報ではなく、勝手な思い込みなのかもしれない。

どうしたのだろう。大輝が首を傾げているとノスフェラトゥがひよいっと膝から降りてどこかへ消えてしまった。

不思議に思っているとヒュツと何かが頬を掠めた。

ぞつとして、身体が硬直したまま、視線で追うと駄菓子回転がっていた。

「乙女の夢をぶち壊すなーっ！ このクソ御曹司っ！！」
やはり理不尽だった。

一樹は殴りかかってくるわけではないにしても次々と菓子投げ
てくる。それも滅茶苦茶に投げているようで狙いが正確だ。

「痛い！ 地味に痛いですから！ 徒花さん、助けて！」

額を押さえた手に菓子が当たってはポトリポトリと落ちていく。

「両方とも三木一樹のことじゃない」

星羅は呟き、菓子を拾い集める。また一樹が止まる。それからべ
たーっと机に突っ伏した。

「灰岡の坊ちゃんがあたしに劣るなんて……！」

「俺、そういういかにもな金持ちになる自分が嫌で周りを説得した
んで」

一体、自分を何だと思っているのか。溜息が出そうになるが、余
計な刺激はするべきではなかった。

そう思った思い込みを押し付けられたことは何度もあるが、一樹
に言われるとは思わなかった。彼女はこちらの事情を知っていたの
だから。

「でも、自転車は電動付きに決まって……」

「まだ言いますか。普通のチャリですって。高級自転車で学校に通
うなんて正気の沙汰じゃないですよ」

どこの世界の少女漫画だろうかと大輝は思ってしまうものだ。

「ううっ……」

「まさか三木先輩は高級自転車にお乗りには……？」

まずいことを言ってしまったかと大輝は不安になる。

「三木一樹は自転車に乗れないの」

グサツという音が聞こえた気がした。

高校三年にもなって自転車にも乗れないのか。それを言っ
てしまえば、今度こそ命がないかもしれない。

「あたくし、猫みたいだから三木一樹が好きなの」

「猫……」

そう見えないこともない。言われてみれば、そうとしか思えなく
なってしまう。彼女は確かに猫に似ている。

大人しくしていれば生徒会長としての妙な風格があるが、キレてしまえば手が付けられなくなる。

顔も吊り上がり気味の二つの大きな目の距離が近く、何だか猫っぽいのだ。

大輝は一樹が星羅の保護者だと思っていたが、実際は逆なのかもしれない。星羅ほど冷静に対処できる人間はいないだろう。

面と向かって猫みたいだから好きなどと言えるのは彼女以外に存在しないだろう。

「とにかく頑張ろう！　ね？」

一樹がひしつと星羅の手を握った。今度はお母さんが乗り移っているのかもしれないが、この場合、一番不安なのは一樹の方だった。ふと、星羅の両親が気になったが、聞けそうになかった。

そうして、大輝と星羅の偽装カップルはスタートしたのだった。

羽佐間拓臣は、大輝とは小学校の途中からの付き合いがある。

ほんの数ヶ月だが、今は大輝より一つ年上だ。そのせいか、兄のような気持ちもある。

実際、二人の弟がいるというのも関係しているかもしれない。大輝のことは三人目の弟のように思っている部分がある。

そんな大輝の悩みが年々深刻化していることにも気付いていた。

正式にはまだ発表されないが、彼との結婚がほぼ決まっている市原茉希と拓臣は幼稚園からの付き合いがある。

今も家族同士の関係は切れることがないが、婚約相手が自分でなくて良かったと思っている。

市原茉希は幼少の頃から関わりたくない女だった。我が儘で、何でも思うようにしたがる様はさながら女王で、噂を聞く限り未だ変わらないようだ。変わるはずもないのかもしれない。

拓臣は友人として大輝が好きだ。死ぬまで友達でいるだろうと思っっているからこそ、不憫で仕方がなかった。

なぜ、大輝のような心優しい男が彼女との人生を今から決められなければならないのだろうか。政略結婚など馬鹿馬鹿しい。あの性格では貰い手に困る彼女を体よく押し付けたいに違いないのだ。そこが灰岡の家ならば、何の不満もないだろう。

できることならば、助けてやりたかった。だが、問題は拓臣の力も羽佐間家の力も全く敵わないとにあり、今まで何もできずにいた。そんな思いからうつかり偽装カップルの話をしてしまったのは間違いだったかもしれない。

まさか、大輝があのだ花星羅を選ぶとは思っていなかった。

そして、彼女が快諾したことを大輝からメールで知らされて自分を恨んだ。これでは彼が救われない。

だから、拓臣は部活の朝練の後、星羅がいる教室へと向かった。こうなれば自分にできることは一つである。

彼女に恨みはない。知り合いというわけではない。だが、噂ならば大輝以上に知っている。大輝はいいところしか信じていない。

星羅を見つけるのは簡単なことだ。呼んでもらうまでもなく、彼女に近寄る。

教室に入った途端、黄色い声が聞こえたが、微笑むだけにしておいた。

「ちよつと話があるんだけど、いいかな？　すぐ終わるから」

教室で話すのはまずい。彼女は素直に頷いた。だから、近くの空き教室に連れて行く。

「俺は大輝の親友の羽佐間拓臣、以後よろしく」

自分のことを話したということは聞いていた。昼休みにでも引き合わされるだろう。だが、その前に手を打っておきたかった。

星羅は何も言わずにじつと見てくる。それが彼女のくせなのかはわからないが、居心地の悪さを感じる。

「大輝から聞いてるだろ？　協力するよ。偽装カップルとは言っても、大輝と付き合うんだから」

「あなた、心と真逆のことを平気な顔で言えるのね」
「真逆？」

拓臣は眉を顰める。

「あなたは、あたくしに協力なんかしたくない」

「おいおい、そりゃあひどいぜ、徒花さん」

やはり彼女は《魔女》らしい。見透かされていると思いつながら、拓臣は平静を装う。

けれど、彼女は欺けなかった。

「あなたが友達思いなのは本当ね。でも、あなた、あたくしを軽蔑している。灰岡大輝から引き離したくて仕方がないの。そのためな

ら、きつと、どんなことでもできる」

「……読まれてるなら、隠す必要もねえか」

ただのイカレ女ではない。それを思い知らされた瞬間だった。

「あたくしの前で隠し事をしても無駄になるわ」

「プライバシーの侵害だ」

どうしたら、心に鋼鉄の盾を持つことができるのだろうか。

心は誰にも読まれない聖域であるはずなのに、この《魔女》は悠々と土足で踏み込んでくるのだ。

「あたくしが心を覗き見ていると思っっているのなら心外だわ」

「ユーモアのある会話のつもりか？ 魔女」

会話は成立するにしても気味が悪い。拓臣は吐き捨てるが、彼女は全く表情を動かさなかった。人形のようにすら思えてしまう。

「あたくしには色々なセンサーがあるの。嘘を発見するセンサーや自分に向けられる感情を察知するセンサー。その組み合わせで心を読んでいるように思わせるのよ」

人間嘘発見器、きつと表情などを見ているのだろう。洞察力が優れているのかもしれない。それがトリックか。

そうとわかっていても、読まれないようにするのは難しい。

黙っていればわからないことをわざわざ明かす理由がわからないが、さつさと要件を言ってしまった方が良さそうだった。

「大輝と別れる」

「望んだのは彼の方」

そんなことは知っていた。なのに、苛立つ。

「何で断らなかつた？ お前も金か？ いくら積まれた？」

「あなたは灰岡大輝が絶対にそんなことをしないと知っている」

星羅は怯えもせず、淡々と返してくる。

確かにそうだが、この女に何がわかるというのだろうか。

この女が大輝のことを自分以上に知っているはずがないという思いが拓臣の中にはある。だから、彼を守るのは自分だけなのだと思っていたかった。実際は無力であるというのに妙なプライドがあ

った。

彼女のような厄介極まりない人間が入ってくればどうすることもできなくなると感じていた。

「あたくし、彼の未来が見えないから引き受けたの」

「あいつの未来？」

「そう、あたくしの未来と同じように、今は暗澹としているの。珍しいのよ、そういうことは」

「そんなの、俺が信じるとでも？」

彼女の言うことなど信じられない。信じられるはずがない。

「でも、あたくし、あなたの未来……と言っても、ちよつと先のこととは見えるのよ」

「俺の未来？」

なぜ、こんなにもイライラするのだろうか。

自分には彼女が見えないのに、一方的に見られているという感覚のせいだろうか。

「良縁はいずれ降ってくる。今は待つ時、焦れば面倒なものを引き寄せるわ。良縁は寝て待て、よ」

余計なお世話だ、と拓臣は思う。

大輝とは違い、拓臣は日々合コンなどに忙しい。女の扱いはわかっているつもりだった。どうせ、適当なことを言っているだけだと聞き流すことにした。

「とにかく、大輝とは早く別れてくれ」

「それは、あたくしが決めることじゃない。灰岡大輝におっしゃって

「大輝には言えねえから来てるって、わかってるだろ？」

自分からけしかけた形で、やめろと言うのはありえない。

けれど、これ以上話しても無駄なようだった。こうなったら、自分が相応しい人間を探してやるしかないだろう。

「何で生徒会長まで……」

昼休み、拓臣の呟きは尤もだと大輝は思った。

星羅を紹介するべく昼食を一緒に食べようと半ば強引に分室に連行したのだ。

朝、自分で会いに行ったからいいと言われたのだが、星羅側の協力者と引き合わせておきたかった。それが、生徒会長三木一樹とは言わないままで。

「何さ何さ、偉大なる共犯者様に向かって」

大きな重を抱え込んで一樹は不機嫌を露わにした。

なぜ、教室にレジャーシートを引いて、遠足気分なのかは聞くべきではないだろう。必要以上に聞かないことが彼女と上手に付き合う秘訣だった。

星羅に至ってはいつも一樹の豪華弁当を分けてもらっているらしく、バイキングの如く自分の皿にとっている。

その向かいで大輝と拓臣は購買で買った弁当を広げていた。

更にはその脇でノスフェラトゥがいかにも高そうなキャットフードを食べている。懐く気はないが、一樹がくれる餌は食べるらしい。

「えっと、俺の親友の羽佐間拓臣です」

「……どうも」

拓臣は緊張しているというよりは警戒心丸だしといった様子だ。

彼は星羅に対していい印象を持っていないのだから当然なのかもしれない。

特に今日は朝から機嫌が悪い。

「うむうむ、よろしく頼むぞよ、タクミン」

「何さか、それ」

拓臣は眉間に皺を刻むが、相手は先輩で、それも悪名高き生徒会長である。彼でも強くは言えないようだった。

「仲間にはあだ名を付けよ、ってことで、タイピーとタクミンなのだ！」

不本意ながら大輝もすでにあだ名を付けられていた。勘弁してほしいと言ったのだが、彼女のネーミングセンスは悲惨である。

「あたしのことも好きなように呼ぶがよい！」

フフンと胸を張った一樹は懐の深さをアピールしたいようだが、それが逆に怖いのだ。何せ、彼女は傍若無人で通っている。好きなようにと言いながら、気に食わなければ何が飛んでくるかわからない。

「あたくし、あなたが好きなように呼ばれているのなんて聞いたことないわ」

冷静に言う星羅は空気が読めないようだ。そういった面で彼女に期待はしていないが、一樹は怒るわけでもない。

「星羅、みんなに親しまれるあだ名を考えてくれないかな？」

大輝は身構えた。星羅ならば平然と爆弾を投下しかねない。拓臣も未だに警戒を解いていない。

「会長でいいじゃないの。皆、それが一番だと思っているわ」

「そうかな？」

星羅が一樹を諭す様は二学年差だというのにまるで大人と子供だ。小学生とその若い母親くらいに見えてしまうほどである。言うまでもないが、母親は星羅の方である。

「あたくしには、三木一樹があらゆるあだ名に文句を付ける未来が見えるわ」

「やっぱり、と思わずにはいらなかった。」

彼女の場合、運命や未来という言葉を使えば何でも言えるのが羨ましいと大輝は感じる。一樹からの信用もあるからこそ、素直に聞き入れられる。

実際は一樹の性格をわかっていれば誰にでも読めることだろう。

尤も、星羅がそこまで考えてやっているのかはわからないが。

「うーん……ミッキーとかミキティとかカズキンとかイツキとかみ

んなしつくりこないしなあ……うん、気軽にカイチヨーって読んでもらえばいいよね」

一樹は納得したようだ。しかし、すぐ隣にフルネームで呼び捨てにする人物がいることには触れなくていいのかと大輝は疑問に思っ
てしまう。しかも、彼女にはあだ名が付けられていない。それも気
になる。

だが、危うきには近寄らずだ。大輝も学習しないわけではない。
余計なことを言えば後で拓臣に説教されるだろう。

そして、彼は今後このスリリングな昼食に巻き込むなと強く言っ
てくるだろう。

大輝としても一樹の存在は緊張感そのものだ。どうにか対策を考
えるべきだと胸に刻む昼休みであった。

放課後、星羅は分室で黙々と何かを作っているようだった。

ビーズのアクセサリを作っているのだろうか。と大輝はそつと覗き込んでみる。

一樹がパソコンや携帯電話からできる分室の予約システムを作ってくれたことで相談者が来ない時間大輝は分室にいられることになった。

一樹がそんなものを作り上げてしまったことよりも、星羅がパソコンを使ったことに些か驚いたのだが、触れてはいけない話題のよくな気がした。魔女だからと言って偏見を持たれることを彼女はきつと好まない。

飛び込みの相談者がやってきた時には生徒会室に避難してもいいと言われたが、大輝としては遠慮したいところだった。その時は図書室にでも行くこうと思っている。

星羅も相談者がいない時間は勉強をしているのだと言う。

だから、頭がいいのだと大輝は納得したが、星羅は魔女には教養が必要なのだと言った。

けれど、今は勉強には見えない。

「頼まれた恋のお守りを作っているの」

集中しているようで、声をかけてはいけないと思っただが、星羅が答えた。大輝の気配にも気付き、聞きたいことも察したようだった。

「へえ、そういうのも作れるんだ」

「おまじないを教えることもあるわ」

おまじない、なんて女の子らしい響きなんだと思ってしまう。

彼女が作っているのもピンクのビーズを使った可愛いものだ。ストラップにするのだろうか。それらしいパーツが置かれている。

「ライバルを蹴落とすおまじないとか？」

大輝は床に荷物を置いて、座り込んで冗談混じりに聞いてみる。すぐにノスフェラトウがやってきて、じゃれてくる。

「あたくしに使えるのは白魔術、黒魔術に手を染める気はないわ」

「回復魔法とか？」

大輝に浮かぶのはゲームの中のことくらいだった。

星羅が眉間に皺を刻む。

「あたくしは魔術師ではあっても魔法使いではないのよ。だから、できるのはただの可愛らしいおまじないよ」

魔術師も魔法使いも同じとしか思えないが、星羅の中では別物のようだった。

それは追々教えてもらえばいいのかもしれないが、今、一番知りたいことはそうではない。彼女が病気や怪我を治せるかは大樹にとつて気にすることではない。

「じゃあ、婚約話をなかつたことにできるおまじないみたいなのかな？」

おまじないに頼るようになるとは末期だと自分でも思う。

《魔女》に頼っている時点でもう駄目なのかもしれない。

振り払うように大輝は猫じゃらしに手を伸ばした。猛烈な勢いでノスフェラトウがパンチをしてくる。

「悪い縁を切ることはできなくもないけれど……」

そこで星羅は言い淀んだ。

「たとえ、今、あなたが切りたがっても、それは切れる運命ではないかもしれない」

拒んでも、足掻いても、家のためと思えば仕方がない。そうなつてしまえば、諦めて彼女を好きになる努力をするかもしれない。

彼女にはそれが見えないからこそ、期待させるようなことは言いたくないのかもしれない。

「だから、基本的に縁切りはあたくしの専門外」

「じゃあ、専門は縁結び？」

今作っている恋のお守りもそのためのものなのだろうか。

「あたくしは皆を幸せにしたいの」

「うん、それ、凄くいいと思う」

彼女は優しい。本気でそう思っているのだとわかった。

「あたしもみんなで幸せ計画には大賛成だよーっ！」

急に飛び込んできた声に大輝はビクツと体を震わせた。

「うわっ、三木先輩!？」

ノックもなく、その上、音も立てずに現れるのだから、ただ者ではない。いつの間にか背後に立たれていた。

「って言うか、タイピーずるいなあ」

一樹は大輝の頭に顎を乗せる。背後に立たれただけでも怖いと言うのに、首でも絞められそうで怖い。

「その、タイピーは勘弁してほしいんですが……」

「タイピーのくせに生意気だぞっ！」

一樹はポカスカと殴ってくるが、まるで肩たたきをされているようだった。

そして、偽装とは言え、恋人が攻撃されているのに、星羅は見向きもしない。

「……で、何がずるいんですか？」

「何で楽しそうにハクシヤクと遊んでるのさ」

振り返って問えば、ぷうっと一樹が頬を膨らませる。

ハクシヤク、つまりノスフェラトウと大輝がじゃれているのが気に食わないようだ。なぜ、ハクシヤクなのかと言えば「白い毛が何となく伯爵のアレっぽいから」とのことだった。アレとは何なのか大輝にもよくわからないが、深くは聞かない方が平和だとわかっていた。

「何で、って言われても……」

勝手に寄ってくる上に手持ちぶさたで遊んでいただけだ。不思議なことは何も無いはずだ。

「その魔法の猫じゃらしを先輩にもお貸しなさい!」

ささつ、と一樹が手を出す。

「魔法つて……普通にここにあつたやつですけど」

ここには猫用のグッズが多数ある。全て星羅と一樹がノスフェラトウと遊ぶために買い揃えたものようだった。

しかし、ただのガラクタと化している。ノスフェラトウにとって星羅はパートナーであつて飼い主ではないようだった。

大輝から猫じゃらしを奪い取つた一樹は本当に魔法がかかっていると信じているのかご機嫌で振り始める。

専門家の星羅でさえ、その魔法は使えなかったというのに。

「くっ……」

一樹はガックリとうなだれ、猫じゃらしを落とす。

やはりと言うべきか、ノスフェラトウはじゃれなかった。それどころか、一樹を馬鹿にするような態度まで取つたのだ。

怖い者知らずの猫である。

「そんなに気を落とさなくても……」

大輝自身、なぜ、こんなに懷かれているのかわからないほどだ。

すると、そのノスフェラトウは違う猫じゃらしをくわえて持つてくる。これで遊んでと言っているようだ。

一樹のじと目も怖いが、ノスフェラトウに引つかかれるのも困る。大輝はその猫じゃらしを手にした。

遊びに飽きたのだと思つていたが、先ほど以上に興奮したノスフェラトウを見ていると、帰る頃にはヘトヘトになっているのではないかと感じる。

「なぜだーっ！」

頭を抱えて大袈裟に叫ぶ一樹も不安の一つだった。

彼女は一体何をしにきたのだろうか。生徒会長とは暇なものなのだろうか。

「星羅、ちよつと」

今度は猫じゃらしを奪おうとせず、一樹は星羅を呼び寄せる。

それから猫じゃらしを彼女に渡すように指示した。

星羅が猫じゃらしを手にするとノスフェラトウが飛びかかる。だが、猫じゃらしには見向きもせず、星羅の手を狙う。慌てて星羅がじゃらしを投げ、大輝がキャッチする。また興奮しきった様子でノスフェラトウが向かってくる。

「なぜなんだーっ!!」

「……なぜかしら」

この世の終わりのように叫ぶ一樹と手をさする星羅、二人は完全にコミュニケーションに失敗している。下に見られているのかもしれない。

「あたしも星羅も首輪付けてあげようとしたら激しく抵抗されたし、何でかなあ……」

フラフラと一樹は椅子に座ってお菓子に手を伸ばす。

「でも、校長先生とは遊んでいたわ」

星羅もいつの間にか作業を終えていたようだ。道具を机の中に押し込み、お茶の用意を始めた。

「えっ……校長先生、来るの?」

初耳である。

「ここを保健室分室なんてものにしたのが誰だと思ってるのさ?」

「てっきり、会長かと」

一樹の得意技の横暴だと思っていたが、そこまでは言えない。

「違う違う。あたしにとつて星羅は急に引越してきたお隣さんなんだってば。生徒会もビックリビックリ。いきなり隣に保健室の出張所的なの作るとか言い出すんだから寝耳に水! いや、本当にあの人が何を考えてるかだけは全然わかんないよ!」

一樹は手を振って否定する。自分の部屋のように居座っている時点で説得力がないのだが。生徒会室の隣にあるからこそ延長のよう
に思えてしまう。

「コンセプトは心の保健室なんだって」

それで保健室分室なのかと大輝はようやく納得した。

「あの人、たまにハーブティーを飲みにいらっしやるわ」

「確実に常連になるよね、あの人。やっぱり、校長ってストレス溜まるのかな？」

何を言えばいいのか大輝にはわからなかった。校長のことはよくわからない。こうして遊んでいる光景も想像し難かった。

「まさか、ハクシヤクって面食い？」

一樹はノスフェラトゥに目を向けるが、答えが返ってくるはずもなかった。

なぜ、自分は二日連続で朝から彼女に会おうとしているのか。

拓臣は納得できないまま、また星羅の教室に向かっていた。それから、また空き教室に連れ込む。

既に星羅と大輝が付き合っているという噂が広まり、拓臣の行動も憶測が飛び交っているが、知ったことではない。

「お前の言う通りだったのかもな」

「あら、良かったじゃない」

昨日、急に気乗りがしなくなって合コンに行くのをやめたところ出会いがあったのだ。本当に寝ているところに降ってきたかのようにだった。

後々、仲間から聞いたところ、合コンには拓臣目当ての女子がいて、おそらく参加していたら面倒なことになっていただろうということだった。

「でも、認めねえぞ」

「あたくし、認めてほしいなんて頼んでないわ」

ムカつくと拓臣は思う。恩着せがましいわけでもなく、またじつと見詰めてくるのだ。

女子に見詰められるということはよくあるが、彼女の場合、それらとは意味が違う。本当に眼球を通して、中身を覗こうとしているかのようだ。

「あなた、お靴を買い換えた方がいいわね。さもなければ怪我をするわ」

拓臣は舌打ちしたい気分だった。忠告しにきたのに、なぜ、自分は彼女から助言を受けているのか。

「とにかく、どうにか別れる理由を考えておいてくれ」

居心地の悪さに早く話を切り上げるしかなかった。

まともな話し合いでは彼女は説得できないだろう。だからと言っ

て実力行使は拓臣の主義ではない。

彼女が悪いわけではないのだが、大輝に悪い影響を与えたくはなかった。手段は選びたいが、拓臣にとっては大輝が何よりも優先だった。

*

星羅は母親の知り合いの家に下宿している。

だから、その近くまで送っていくのが大輝の役目だった。

下宿先の人間は彼女にとって家族同然だと言うが、本当の家族の話聞いたことはない。聞くべきではないと感じた。

彼女が住んでいるのはよく当たると評判の占いかフェだ。

いつか、《彼女》が行ってみたいと言っていたことを思い出すと気が重くなる。

《彼女》にはまだ星羅のことを話していない。拓臣は耳に入る前に事情を説明した方がいいと言ったが、大輝は次に会う時に話せばいいと思っていた。

こうして送るのも通り道であって、一樹に言われたからであって、外でまで彼女と会うことはない。

「じゃあ、また明日」

こんな毎日をどれだけ繰り返すのだろうかと不意に思う。

何もかもから逃げ回って、関係のない女の子を巻き込んでいる。

虚しいことはわかってる。

それなのに、いつまで自分は現実から逃げ続けるのだろうか。

「ええ、気を付けて」

星羅の言葉に普通は逆だと大輝は思う。

ただの事務的な挨拶で大した意味はないだろう。

不安になるのは、きつと週末に《彼女》に会わなければならぬからだ。

考えるだけで息苦しくなる。それは一樹によるものとはまるで違う。頭が痛い。お腹が痛い。
心を落ち着かせるようなお守りを今度作ってもらおうかと思いいながら、大輝は一人家へと帰るのだった。

*

二度あることは三度ある。

その日の朝も拓臣は星羅を連れ出した。星羅の方も予期していたようでもある。

「バツシュがそろそろヤバかった。お前に言われなきゃ、怪我するまで気付かずに普通に履いてたよ」

お靴と言われて確認したスニーカーは何も問題がなかった。だが、バスケットシューズは違った。

「報告はいらないわ」

言いたいのはそんなことではないでしょう。

そんな視線を投げかけてくる。見透かされていると思えば思うほど苛立ってしまう。それは八つ当たりかもしれない。少なくとも、星羅に悪意はないだろう。

「で、次は？」

「次？」

星羅が首を傾げる。

もしかしたら、また彼女が助言をくれるのではと期待していた。

「ねえなら、いい」

「あたくしはいつでも相談に乗るわよ？」

「別におまえのこと信じてるってわけじゃねえからな」

まるで自分が相談したがっているような言い方に思わず反抗的な態度を取ってしまうのは悪い癖かもしれない。

けれど、星羅は全く気にした様子がない。

「あのさ、大輝の未来が見えないって言ったよな？」

「ええ、見えないわ」

「ちよつと先さえ見えないってことか？」

「そう、未だ来ない時のこと、あなたに見えたようなことは何も」
「出会いや壊れた靴、そんな小さなことでも見えないのが拓臣にとつての普通で、見えるのが星羅にとつての普通だ。」

それなのに、大輝は彼女の普通に当てはまらない。

「自分のことも見えないんだろ？」

「ええ、あたくしはあたくしを救うことができないの。救われたいと思うわけでもないのだけれど。だから、灰岡大輝の言う不幸を楽しんでみようと思うの」

何の偽りもなく、彼女は言っているのだろう。本気でそう思っているのだ。

それがわかってしまうと、彼女に大輝と別れるように迫るのは間違いのように感じる。

「……たとえば、俺がいて、大輝を救うことができるのか？」

大輝に提案したこと、それは間違いではなかったのだろうか。

「あなたを通して見えるものもあるわ。あなたは、灰岡大輝と切れないものがある。貴方達は魂で繋がる友人だから」

「そっか……」

拓臣は大輝の親友だ。だからこそ、星羅と引き合わせるべきではないと思っていたが、それは間違っていたのかもしれない。

《魔女》は思っていたよりもずっとまともな人間だ。決して見返りを求めない。不幸を前提に付き合ってくれという非常識な申し出に真摯に対応している。彼女に当たるのはお門違いというものだろう。

「しばらく様子見てやることにする」

近頃の大輝は楽しそうにしている。特に、星羅と一樹といる時は自然で、ノスフェラトゥが遊び相手になっているようだ。それは悪くないことだ。

「でも、認めるってわけじゃねえからな」

どうして素直に言えないのか。

「それでいいわ。見えないってことはあたくしも間違うかもしれないってこと、その時にはあなたが止めてくれればいいわ」

たとえば、彼女が「あなたは必ず認めるわ」などと言ったら、反発していただろう。

なのに、彼女はそうは言わない。それが、計算でないこともわかる。

彼女は計算で動く人間ではない。

昼休み、大輝はガツクリとうなだれていた。

昼食が全く喉を通らない。一人だけ葬式の気分である。

「どうしたの、タイピー。今日で世界が終わるみたいな顔して」

ステーキを頬張る一樹は心配しているような口振りで、明らかに面白がっている。

「今日で終わって欲しい気分ですよ」

明日がこなければいいのに。そう思わざるを得ない。

「こいつ、明日デートなんスよ。将来の奥さんと」

理由を知る拓臣が説明する。

「あーあーあーご愁傷様」

チーン、と一樹が手を合わせる。

「聞きたいことがあるって言われて、今からガタガタブルブル……」
昨日の電話の内容を思い返せばゾツとする。そもそもデートだけでも憂鬱なのに、声だけの彼女は怒っているように聞こえた。

「お前、言わなかったんだな？ この魔女っ子のこと」

拓臣に言われたことを聞かなかった形だ。今は申し訳なく思っている。

「事後でいいと思って。まさか、こんなに早くバレるとは……」

次のデートで言えばいいだろうと本気で思っていた。彼女は許してくれるだろうと。だが、それも不安になってきた。

彼女ははっきりとは言わなかったのだが、噂と言っていたのだから間違いなくこのことだろう。

以前にも噂に聞いたことを弁明させられた。女子に言い寄られていることから始まり、それを拒んでいることから生まれた《ゲイ説》や《不倫説》など、ことあるごとに。今すぐにも婚約を発表したいと迫られたこともある。

自分のことながら懲りない男なのかもしれないと思ってしまふ。

拓臣の忠告もあつた。こうなることもわかつていたはずだ。

だが、事前に言えばそんなことは駄目だと反対されたらう。大輝にとつて星羅は落ち着く存在だ。そして、一樹も始めは怖かつたが、本当は面白い人間だということがわかつた。

こうして拓臣を巻き込んで昼食を共にするのは楽しい。それがなくなつてしまえば、何もなくなつてしまふような気がしている。

「女の情報網を甘く見る男は女に泣くのよ。ここにいる三木一樹は情報を駆使して数々の男を号泣させてきたのだから」

今日も一樹の豪華弁当バイキングを楽しむ星羅は淡々と言う。

まさか彼女がそんなことを言うとは思わなかつたが、彼女の場合是一般論というよりも一樹のことだつた。

一樹の場合、女の情報網というより何か組織めいた影を感じてしまふ。何せ、彼女には生徒会役員という名の下僕達がいる。

「じゃあ、今日はみんなでタイプーのお別れ会しようよ!」

「お別れつて、俺、死亡決定ですか……?」

「最後の晚餐にあたしのお昼分けてあげるよつ!」

ずいつと一樹が重を突き出しくるがもうほとんど残つてはいなかつた。これは嫌がらせに違いないと大輝は察する。

他人の不幸は蜜の味、そういうことだ。

「……デートがうまくいくおまじないとかつてあるかな?」

縁は切れないと言われたが、逆の発想はどうだろうかと大輝なりに考えてみた。

「うまくいつて、よろしいの?」

星羅は首を傾げている。大輝の思考が読めないのだろう。

「効きすぎて、すっかり結婚を誓い合う可能性あるよ?」

一樹はニヤツと笑う。内情を知っているだけに悪質である。

「な、な、な、なんでそうなつちゃうんですかつ! こ、困ります! ちよー困りますから!」

「じよーだん、じよーだんつ、星羅の魔術はそこまで強くないもんねつ! あははははははつ! タイピーおもしろーつ!」

床を叩いての爆笑である。

自分は玩具にされているのではないか。

不安になる大輝の膝をぽんと叩く手があり、思わず振り向く。だが、拓臣だと思っただのに彼とは反対で、そこにいたのは右の前足を乗せるノスフェラトゥだった。慰めてくれてるつもりなのだろうか。

「あんまりからかわないでやって下さいっス」

溜息混じりに言う彼こそ、真の親友だと思っただが、その顔は明らかに笑いを堪えている。

結局、皆、自分にはない現実を楽しんでいるに違いないのだ。

月曜日の昼だと言うのに、大輝は最早金曜日の気分だった。あるいは、金曜日からずっと引きずっているのかもしれない。

これからあと四日あると思うと気が重く、その先にまた面倒があると思うと生きていることが嫌になったりもする。

「うわっ、タイプー。ぞんびー」

一樹は指さして笑っている。何の気遣いもなく爆笑している。

星羅は何も言えないとわかっていているからか、余計なことはいわない。

問題は、大輝の隣だ。

「タクミンはいい顔してるなあー何があったのかなあ？」

朝から拓臣はずっと上機嫌だった。

けれど、大輝を宥めるばかりで彼は自分のことは言わなかった。

一樹に疑惑の眼差しを向けられながらも笑ってごまかそうとしていた。

だが、ごまかされない人間がいる。厄介なことに彼女は秘密を見抜く上に、空気が読めない。

こちらが望むような気遣いはまずしてくれないと思った方がいい。

「羽佐間拓臣は彼女ができたそうよ」

「ま、マジかよ？ 合コンで？」

大輝はずいっと拓臣に詰め寄った。そんな話は全く聞いていない。それに至る過程さえまるで耳に入っていない。

すると、拓臣は気まずそうに下を向いた。

「拓臣い、俺達、親友だよな？」

「親友だよねえ？ タクミン」

一樹まで便乗してしまつては黙っているわけにはいかないだろう。

大輝とて彼女の本気の尋問を受けるのだけは避けたい。拓臣は重い口を開いた。

「いや……そいつに言われて寝てたら……巨乳、降ってきた」
「はあ？」

星羅を指し、言いにくそうに拓臣は話した。彼が星羅から助言を受けたことは不思議ではない。

朝に拓臣が星羅に会いに行っているという話も聞いたが、大輝としては全く気にしていなかった。話したいことがあれば拓臣の方から話してくると思っていた。

「うちの学校の子？」

「ええ、まあ……」

「何年の？」

「一年」

一樹に続いて大輝は質問をぶつける。

「彼女も連れてくればいいじゃないじゃん！ みんなでお昼はたのしーよっ！ 四人よりも五人！」

「いや、でも……」

「だって、一年生なら、ここにもいるし」

渋る拓臣を無視して一樹は尚も迫る。

大輝もそれがいいと思う。拓臣が何も言わないから、一人では心細いと言って半ば無理に連れてきていることもある。

昼休みも彼女と過ごしたいだろうに、違う女と昼食を一緒に食べることに負い目を感じているかもしれない。たとえ、全くそういう関係になり得ない二人だとしても。

「あなた、ちよつと悩んでいるわね」

じーつと星羅が拓臣を見る。

「それは連れてこいつてことか？」

どうやら星羅には本当に友達がいなかった。ノスフェラトウと仲良くしたがって失敗し続けているが、同じように失敗している一樹という時は楽しそうに見える。一樹もまた部下はいても友達がいるかと言えば怪しいところがある。誰もが彼女に恐れをなしているからだ。

大輝としては拓臣を共犯者に行っている時点で心苦しいのに、その彼女まで巻き込むのは本当に悪いと思う。けれど、その彼女が星羅と友達になってくれればいいのに、と考えずにはいられない。

彼女に不幸になってほしいというわけではない。できることならば、そうしたくない。自分が振りかけてしまう不幸から守ってくれる誰かが彼女の前に現れてほしいと思っっている。

「隠し事は崩壊を招くわよ？ 恋も友情も」

「そーだそーだっ！」

一樹は楽しそうに大輝と星羅を煽っている。

「会長は冷やかしたいだけっスよね？」

「おう、バレたかーっ！」

あちゃー、と顔に手を当てている一樹は言うなれば愉快犯だ。焚き付けて、その騒ぎを見て楽しんでいる。

拓臣の彼女がどんな人物かはわからないが、一樹と対面することを考えれば気の毒にも思えてくる。

生徒会長三木一樹の恐ろしさは一年生にも語り継がれている頃だろう。実際に一樹は横暴なところが多々ある。

「大体、既に疑われてるっスよ」

拓臣は秘密を守ろうとしているだろう。朝に星羅を連行することも自分のためを思っでしていることだろう。

大輝はわかっている。いざとなれば、拓臣は彼女を諦めてしまうような男だと。

「連れてくればいいじゃん」

大輝としては親友の彼女にまで秘密にすることもない。

「うーん……」

「わかった。拓臣、毎日連れてきて悪かった。明日からは彼女と昼を食べていいよ、俺は全然大丈夫だから」

渋る拓臣に大輝は気づく。これは自分の問題であって、彼の問題ではない。ついてきてくれ、彼女もつれてこいなどと強制する権利など自分にはありはしないのだ。

「でも、羽佐間拓臣はあたくしを監視したいのよ」

大輝は拓臣を盗み見る。それは星羅の思い込みではなく、凶星のようだ。以前ほどの警戒はないようだが、昼休みぐらいは目を光らせておきたいのかもしれない。

「まあ、深刻に考えるなつて。俺は本当に大丈夫だから、自分の幸せの方を優先しろつて、な？」

「……わかった。連れてきていいんだな？ 本当にいいんだな？」

「あ、ああ……お前の彼女なら歓迎するぜ」

それは、彼女の方に何かあるように聞こえたが、誰も追求しなかった。

拓臣も今聞いたところで答えないだろう。

「それで、タイプピー、どんな地獄を見たの？」

一樹の視線が向けられ、大輝は一気に一昨日のことを思い出してしまう。

折角、拓臣の彼女の話で楽しんでいたというのに気分が下降を始める。

「話を完全に逸らしたと見せかけて奈落落としっすか、えげつないっすね」

質問責めにされた仕返しのもりか、拓臣はニヤニヤ笑っている。

「あたしが何も聞かないわけじゃないじゃん？ 安心させてから突き落とす時の快感は……うふっ」

（悪魔だ……悪魔がいる……！）

大輝は内心泣きたかった。

一樹の玩具にされているのはわかっていたが、これではあんまりだ。

「実にいい顔をしてらっしやる」

（くそっ……こいつもいい顔しやがって……！）

大輝には拓臣も悪魔に見えた。先程、大輝が一樹側についたのを根に持っているのだろう。

「そこまでにして差し上げたら？」

大輝には星羅が天使に思えた。《魔女》だが、悪魔ではない。

「表情は読めるのよ。随分思い詰めているのね」

彼女だけはわかってくれる。悪魔二人とは大違いだ。

「あのさ、徒花さん。会長はこれで大丈夫なの？」

ふと疑問に思っただけ聞いてみた。星羅は大輝以外の人間は見えてい
るはずである。見えにくい場合もあるとも聞いたのだが。

「これで、って何さ！」

一樹は憤慨したが、星羅は宥めて、さらりと続けた。

「三木一樹は不思議と人に恨まれないのよ。DMが集まるみたい」

「ど、DM……」

大輝は啞然とした。そんな言葉まで彼女の口から出るとは思わな
かった。何せ、彼女には古風なイメージもある。

これまでに何度か驚かされているが、毎回星羅は大輝の想像を飛
び越えてくる。

「……徒花、お前もしかして会長に言葉教わってないか？」

大いにありえると大輝は心の中で頷く。

一樹はDSだ。数日とは言え、大輝達よりは付き合いのある二人
だ。一樹を介して星羅が変な言葉を覚えていたとしても何ら不思議
ではない。

「ちよつとお、あたしを何だと思ってるのさ？ 星羅は最初っから
変な言葉色々知ってたよ」

頬を膨らませた一樹は「あたしも驚いたけどさあ」とぼやく。

一樹でないとするれば、星羅の影の教育係は一体誰なのだろうか。

「あたくし、教科書に載ってない言葉は師匠に教わっているの。魔
女たるもの、常に最新の言葉を使いこなせなくてはいけないそうよ」

「師匠って下宿先の……？」

占いカフェのオーナー、そこに至って大輝は追及しないことにし
た。聞いてはいけない、そうひしひしと感じる。

「まあ、いいや。タイピーのことは放課後、きっちり説明してもら
うからねっ！ 覚悟しておけー！ なんて！ あっはっはっはっは
っ！」

また大輝は忘れていた。

そして、数時間、尋問が延びたことに喜びは感じなかった。むしろ、余計憂鬱になった。

その時は気分が安定するようなハーブティーを淹れてもらおう、
そう心に決めて諦めるしかなかった。

その放課後、大輝は予定通り星羅にハーブティーを淹れてもらい、ほっと一息吐いていた。少し心が落ち着いていたのを感じる。

今日は床ではなく、星羅の向かいに座らせてもらっているが、一樹がいないわけではない。

「あのさ、タイピー。あたしも鬼じゃないんだよ。一応、協力者としてあちらさんの出方は把握させてもらわないと、こっちだって手の打ちようがないんだよ。お手上げーになっちゃうのさ」

一樹はパソコンデスクのチェアに座ってくるくると回っている。予約システムを作ったことで、新たに運び込んだものだ。

「会長が何をしてくれるって言うんですか？」

「まあ、何と言えるほど形になってるわけじゃないけどさ……」

一瞬、言葉を間違えたと思ったが、一樹はそのまま反対に回るだけだった。

「タクミンには話したんだろうからそっちに聞いたっていいけど、星羅には自分から言うべきなんじゃないの？」

「でも、徒花さんとは学校でのことで、それに、一応、納得はしてくれたんです」

それは半分くらいが嘘だと大輝自身がわかっている。

二人の尋問官を相手に欺くことが不可能に近いことも。

「だったら、ちゃんと報告しなさいってば！」

一樹が星羅の隣まで椅子をシャーッと滑らせ、バンッと机を叩く。カップが耳障りな音を立てた。

「灰岡大輝、それはあたくしに話すべきことなの？」

星羅は聞こうとしない。けれど、その問いは大輝を迷わせる。

隠し事をしてはいけないような仲ではない。何でも話すような仲でもない。恋人のフリをするからと言って友達でもない。

星羅は必要なことならば聞くだろう。だが、その判断は大輝に委

ねてくる。それが都合良くもあり、複雑なところでもある。

「あたくし、あなたのことが見えないから、聞くべきかわからないの。だから、話すか話さないかはあなたが判断してちょうだい。きつと助言をしてあげられないから、あたくしから聞いたりはいしない。彼女は詰め寄ってきたりはしない。何もかも話して、隠さないでなどと言つて大輝を困らせたりしない。

ただ菓子の入った籠を滑らせてくる。

「……俺は学校の外でまで徒花さんを巻き込みたくないんだ」

一樹の視線に大輝は耐えきれなくなった。

嘘ではない。本心だ。

元々、学校の中でだけの話だった。

星羅がお人好しだと知ってしまったからこそ、余計に巻き込んではいけない気がする。彼女は自分の危険を予知することができない。

「市原の嬢ちゃんが何か言ったんだね？」

一樹の目が細められる。その声にも陰しさが滲んでいる。

「徒花さんに会わせてほしいって。そうしたら認めるって言われませんでした」

最早白状するしかなかった。

「それって、完全に納得したとは言わないじゃん！ むしろ納得してない！！」

バンバンと一樹が机を叩く。

やはり、彼女は怒ると迫力がある。これが横暴でないとわかっていいるからこそ、怖いと感じてしまうのかもしれない。

隣で星羅が宥めようとしているが、一樹を落ち着けるのは彼女でも至難の業のようだ。

「俺は学校の外で、それも休みの日まで徒花さんに協力してもらうのは違うと思うんです。そこまでしてもらう理由はないんです」

これは正当な意見だという自信が大輝にはあったが、一樹の態度は緩むことなく、足を組む。

「かつたいなあ、タイピー。何事にも例外は付き物だし、会わせれば、あちらさんは納得するんでしょ？ いんや、そう言ったからには絶対に納得させなきゃ。納得しませんなんて言ったらぶん殴りたくなるけどね」

なぜ、一樹がそこまで怒るのか、大輝はわからない。彼女も拓臣のように市原茉希と何かあるのだろうか。

「市原の嬢ちゃんみたいのはすぐにつけ上がるんだ。絞めるべきところは絞め上げないと厄介なことになる」

段々と言葉が物騒になってきているが、何と言ったらいいかわからない。

大輝が黙っていても一樹は続ける。

「大体、いくら政略だなんだって言ってもタイピーの方がちょー立場弱いつてわけでもないんだから、譲歩譲歩じゃあ全部市原に乗っ取られるよ？ それとも、女に乗られるのが趣味？」

ここままだと一樹の口からとんでもない言葉が飛び出しそうだった。

何か言わなければと大輝は脳をフルに回転させる。

「な、何か、会長ってヤクザみたいですよな」

冗談のつもりだった。

それなのに、一樹の目は剃刀のように細い。

「あのね、あたしがカタギじゃないとかは今関係ない」

一樹は即座に返した。確かに彼女のことは議論する必要はない。

最悪の冗談だった。

「三木一樹、灰岡大輝が困っているわ」

星羅は今度は籠を一樹の方へ引き寄せた。まるで猫じゃらしのように菓子の一つを一樹の目の前にちらつかせ、気を引く。

一樹は猫のように菓子を夢中で追っている。

「灰岡大輝、あたくしは、いつでも、どこにいようと、何をしようよと、助けを求められればどこへでも行くわ。箒で空は飛べないけれど、体は張るわ」

凜と星羅が言い放つ。とても頼もしく思えたが、現実には引き戻された一樹が目を瞬かせた。

「星羅、体張るの意味誤解してないよね？」

「苦いドリンクを一気飲みしたり、熱湯かけられたり、落とし穴に落ちたり……それで大袈裟な反応をすればよろしいのよね？」

「それは芸人さんがすること！」

ビシッと一樹のツツコミが入る。大輝も思わず「なんでやねん！」と叫びたくなった。ボケているつもりなのか、本気なのか、判断できかねる。

彼女はリアクション芸人でも目指しているのだろうか。

普段、どんなテレビを観ているのか、聞くべきなのかもしれない。思えば、帰り道はいつも拓臣との思い出ばかりを一方的に話していた。

「こ、コホン！ そういうことだから、思い切って魔女対決セツティングしちやいなよ！」

わざとらしい咳払いをして一樹は話を纏めようとしたつもりらしいが、迷走の種を蒔いただけだった。

「ま、魔女対決……？」

「あ、あつちは魔性の女、略して魔女ね」

（ああ、なるほど）

大輝も思わず納得してしまった。拓臣がいれば、同じように頷いたことだろう。

「正統でない魔女と一緒にしないでちょうだい。心外だわ」

星羅は腕を組んで、怒りを表しているつもりらしかった。

「まあ、あつちは黒魔女って感じだよー」

「あたくしは白魔女だもの。黒には手を染めないわ」

星羅にとってそれは絶対のようであった。呪いなど人が不幸になるようなことには手を出さない。

しかし、見た目の印象とは矛盾すると大輝はこのところ思っていた。

「あのさ、聞いたかったんだけど、何で黒いケープなの？」

白魔女ならば白いケープではないのかと安易に考えてしまう。

前に暑くないのかと聞いてみたことはあったが、なぜかは聞かなかった。その時は暖かくなって風通しのいい生地が変わったのだと彼女は言っていたのだが。

「さあ、師匠に聞いてもわからなかったわ」

どうやら、彼女の趣味ではないらしい。師匠という単語が出てくる度、大輝はそれ以上聞いてはいけないような気がしてしまう。

「で、タイプー、覚悟は決まった？」

一樹は椅子を転がして、大輝にずっと詰め寄る。
嫌でも覚悟を決めさせられることだろう。

「ごめん、徒花さん。本当にごめん！ 今週の土曜日、どうにか空けてくれるかな？」

大輝は顔の前でパンと手を合わせた。星羅は学校側の許可を得て、下宿先の古いカフェでアルバイトをしている。土曜日など特に忙しいだろうと大輝は思っていた。

「どういうわけか、あたくし、その日、お休みになっているのよ」
猫の写真が印刷されたスケジュール手帳を取り出して星羅は言う。
彼女自身不思議に思っているようだ。

「それなら、尚更、どこか買い物に行ったりとか……」
この後に及んでまた覚悟は固まっていけないのかもしれない。星羅が忙しいのだと言えば、先延ばしにできるかもしれない。

だが、永遠に延期は不可能だろう。もしかしたら、古いカフェに押し掛けると言い出すかもしれない。それはまずい。

「あたくしはあなたと契約したのよ、灰岡大輝」
「でも……」

「平日学校にいる時だけなんていう約束はなかったわ」
星羅はメモのページを見せてくる。女の子らしい丸く小さな字で書かれているのは二人の約束事だ。

「そりゃあ、あの時は思い付かなかったよ……まさか、こんなことになるなんて」

本当にそうなのか。浅はかなフリをしているのではないか。
自分の中で声が聞こえる。けれど、聞こえないフリをした。考えたくないことから逃げたい。

「あたくしは、人のためになることなら何だってする。あなたは、

あたくしに助けを求めているのでしょ？」

星羅のひたむきさが大輝の胸を締め付ける。拓臣は《イカレ女》
だと言っていたが、全く違う。

彼女は自分のことに無欲だ。けれど、他人を救うということには
貪欲さを見せる。不幸を前提といった非常識な申し出さえ快諾して
しまうほどに。

自分と同じように未来が見えない大輝への興味だったのかもしれないし、
どうかにかしなればという使命感に駆られたのかもしれない。ノスフェラトウの
奇妙なメッセージもあった。

彼女は悲劇のヒロインを気取るわけでもなく、彼女は事態を深刻
に受け止めてくれている。ここまで自分のことを考えてくれる人間
を大輝は拓臣の他に知らなかった。

それも拓臣とは付き合いが長いが、星羅とは会ったばかりである。
「素直に言っただろう。あなたに黙られると、あたくし、何も
できなくて困るの」

「うん、助けてほしいよ。そう思ってる。でも、俺は君に何ができ
るの？」

助けてほしい。そう思うのと同じくらい、星羅を不幸にしたいと、
してはいけな思っている。

なぜ、あの時、あんなことを言ってしまったのか自分でもわから
ないほどだった。

誰よりも心優しいこの少女を不幸にしてはいけな思っている一人の
自分が言っているような気がするのだ。

「あなたは、あたくしを不幸にできる。それで十分よ」
「でも……」

やっぱり幸せになってほしい、とは言えなかった。

「あたくしにも色々あるのよ。この世の不幸を一身に受けたい事情
とかね」

「女の色々は聞いちゃダメなんだぞっ！」

ぶすつと一樹の人差し指が頬に刺さる。そのまま、うりうりと更

に突き刺さるが、何も言えなかった。

もうどうにでもしてくれ、という気分だった。今日はどうやら自分の味方らしいノスフェラトウも見当たらない。

「そんなに良心が痛むならさ、結婚する時には友人つてことであたし達も呼んでよ。豪華料理たらふく食べて笑って引き出物持って帰ってあげるから」

一樹が来れば滅茶苦茶になるような気がする。考えるだけで頭や腹が痛み出す。もう一杯、ハーブティーを淹れてもらおうかと思つて大気は星羅に目を向ける。

「あたくし、ドラジエが好きよ」

「どらじえ？」

「あーっ、あれだよ、砂糖に包まれたアーモンド！ あたしも大好きだよーっ！」

「覚えておきます……」

まさか星羅まで一樹の話に乗るとは思わなかった。それも、かなり期待に満ちた眼差しを向けられている気がする。

そんなに好きなら、どうにか入手できないか、調べてみるべきだろうか。彼女は見返りを求めないだろうが、大輝としてはただ利用するというのが心苦しいというものがある。やはり菓子ぐらい贈るのが礼儀というものだろう。

「あ、ご祝儀はさ、『てめえにやる金はねえ！ 鼻血も出ねえ！』つて紙に書いて入れとくから立て替えてね。交通費と衣装代も後で振り込んでくれればいいから」

「ただでさえ考えたくないのに、勘弁して下さいよ、もう……」

まだ続けるか、と大輝はガツクリと肩を落とす。

それは最早立派なたかりではないだろうか。できることならば、結婚しなくていい方向に運命を修正したいと言つのに。

「タイピー、考えてごらんよ。星羅は人間未来読み取り装置なんさね、市原の嬢ちゃん見たら何かわかるかもしれないよ？」

ポンと一樹に肩を叩かれて、大輝は思わず溜息をこぼしていた。
「それが不安だつてわかつてます？」

先輩だろうと関係ない星羅が市原茉希に対して遠慮するとも思えない。

そればかりか先程一樹が《魔女》と言ったせいで対抗意識を燃やす可能性もある。

「そりゃあ、星羅は空気読まないけどさ……だからこそ、何かあつてもタイプピーは全部星羅のせいにはできるじゃん。市原の嬢ちゃんの矛先、全部星羅に変えて自分は逃げればいいんだ」

「本人の目の前でよく極悪なこと言えますね」

あくまで大輝は星羅を利用してという立場だ。自分の体裁を守るためにそういうことを言わなければならなくなるかもしれない。だが、二人は短い付き合いながら互いを気に入っているはずだ。

「あら、あたくしは何と言われようと構わないわ。だから、あなたは自分が危うくなつたら、迷わずあたくしを貶めればいいのよ」

星羅はそれが当然だと思っているようである。まさか、彼女も一樹の周りに集まるというドMの例外ではないのだろうか。

「タイプピーは自分のために星羅を犠牲にすることを選んだんだ。自分一人が青春謳歌したいからつて、現実から逃げるために」

思い知らせるような言葉に大輝は気圧される。その通りなのに、そうではないと言いたがつている自分がいる。

「会長は徒花さんが本当に不幸になつてもいいんですか？」

「いいよ？」

平然と笑つて答える一樹にぎよつとして大輝は星羅を見た。ドS発言に全く動じずに菓子を手に行っている。

「星羅が不幸になつた分、あたしが全部取り返してやるよ。タイプピーにボロ雑巾にされたつて最高級のシルクに変えてみせる。星羅はあたしが幸せにする！ だから、行く宛がなくなつたら、うちにおいで？」

また椅子を転がして、サツと星羅の隣に戻つた一樹は彼女の手を

ヒシツと力強く掴んで見詰めだ。

思わず惚れてしまいそうになるほどの強い言葉である。益々彼女が何者であるのか疑問になってしまふ。

だが、星羅は頬を染めるわけでもなく、その手を外して、一樹の手にそつと菓子に乗せた。

「三木一樹、あたくしを使って金儲けをしようとする、もれなくどん底に落ちると忠告しておくわ」

「しないしない！ やだなあ、もう！」

パツと星羅から離れて、その場でくるくる回りだした一樹は凶星だったのかもしれない。否定しているが、全く考えていなかったということはないだろう。

どうやら、星羅は人を幸せにするためとは言っても金銭に関連したことを請け負わないようだ。際限のないその欲望の先に破滅があるからだろうか。

「灰岡大輝、あたくしにはもう失うものがないの。だから、気にしないでちょうだい」

「そんなの……」

悲しすぎる。

なぜ、悲哀を見せずに彼女はそんなことをサラサラと言ってしまうのだろうか。大輝には全くわからない。彼女だって悲しくないはずがないだろう。

「これはマジ話なのよ、灰岡大輝。あたくし、ほぼ天涯孤独なの」
わざわざ、『ほぼ』と付けるところが気にかかるが、それを聞けるほど大輝の神経は凶太くはなかった。

「でも、今はその話はしないわ。きつと、するべき時は近いから」
それを聞かされるのは一体どんな時なのだろうか。

彼女はその時にしか話してくれないだろう。そして、彼女が背負っている物を知ってしまったら、幸せにしたいという思いはきつと強くなってしまうだろう。

ただの同情なのかもしれない。彼女にとっては迷惑なのかもしれ

ない。けれど、確実に心は迷っていた。

翌日の昼、拓臣は予告通り彼女を連れてきた。

一言で表すならば、拓臣が言うように巨乳なのだろうか。

それも降ってきたというラブコメ的展開とあつては羨ましい限りである。

「初めまして、私、えっと……」

連れてこられた彼女はその場の空気に圧倒されている。

がらんとした教室にレジャーシートを引き、女子二人は既に準備万端である。大輝としては変わり者二人を女子と形容することに若干の抵抗を覚えてしまふのだが。

今日の質問責めの対象をロックオンして舌なめずりしている一樹と、いつも通り彼女の豪華弁当の中から食べたい物を少しずつ自分の皿に取り分けている星羅は気楽なものである。

きっと《怖い又シ二人》として見られていることなど微塵も気にしていないのだろう。多少タイプの違いはあつても、どちらも周りを気にしない、良く言えばマイペースな二人なのだ。

「俺の彼女」

拓臣はもうすっかり慣れたもので、けろりとしている。

自分よりもこの場に適応していると大輝も思う。

「えーっと、三沢夏実みさわなつみです。よろしく願います」

ぺこりと彼女は頭を下げる。完全に萎縮しているのが見て取れる。自分も初めはこうだったかもしれないと大輝はしみじみ思う。

「かったいなあ、ナツミン。緩く行こーよ。ゆるーくさあ」

「この人、一番緩いから」

ひらひらと手を振る一樹を拓臣が指さす。

一樹は一番年上でありながら、一番子供だ。

尤も、大輝に言わせれば『緩い時は緩い。堅い時はとことん堅い』だ。昨日のヤクザ疑惑を思い起こせば体に震えが走る。

「で、一番堅いのがいっつ」
「失礼ね、羽佐間拓臣。あたくしはこれで緩いのよ」
続いて指さされた星羅は腕を組んでみせ、怒りを示した。
「先輩のことをフルネームで呼び捨てにする奴が緩いわけあるか！」
星羅が敬語を使うのを大輝も聞いたことがない。
だが、彼女が緩くなると話にならなくなるとも思う。彼女のボケにツッコミを入れることができるのは一樹だけかもしれない。

拓臣がシートに座り、ちょいちょいと手招きすれば夏実が隣にちょよんと座る。

大輝はどこに座るべきか悩んだ。シートに空きがない。

「タイプー、あっちな」

「えっ……」

一樹が指さす方を見て大輝は困惑した。

広げられた新聞紙と座布団、ノスフェラトゥの餌皿が置かれている。

「ここはカップル席」

しっしっ、と一樹が手を振る。

「いや、俺、一応、徒花さんの……」

彼氏なんですけど、と言おうとして一樹に睨まれる。

「何、タイプーの分際であたしを追い出そうって？」

「すみませんでした！」

大輝は勢いよく頭を下げる。

「ほら、タイプーの相手も飛んできたよ」

ぴゅーっと何かが飛んできたかと思えば、座布団の上に乗る。

（俺はあっちなのか……）

大輝はがつくりと肩を落とした。つまり、新聞紙の上、ノスフェラトゥにも劣るということだ。あんまりである。

「えっと、徒花さん……？」

星羅の向かいに座った夏実が声を恐る恐るといった様子で声を発する。

「ええ、《魔女》の徒花星羅よ」

「あ、あの、星羅ちゃんって呼んでもいい？」

何を言い出すかと思えば、夏実はなぜかキラキラとした眼差しを向けている。

「うむ。あたしが推奨する」

星羅が答えるよりも先に一樹は満面の笑みで頷いた。

「あたくしも構わないわ」

いつも通りのようで、星羅は照れているように見えた。

「その……占ってもらいたいことがあって……でもでも、こんないきなり失礼だと思うし、えーっと……」

「あたくしは、いつでも誰の相談にも乗るわ。遠慮なんていらなのよ」

星羅はこれで自然体だと大輝はわかっているが、夏実は緊張しきっている。《魔女》の隣にるのが《魔王》の如き一樹というのは刺激が強すぎるのかもしれない。

「お近付きの印ってことで見てもらえばいいだろ、俺なんか頼んでもいねえのに見られてるからな」

気にすんな、と拓臣は笑っている。何だかんだ言いながら彼は星羅を認め始めている。何せ、彼は『巨乳、降ってきた』という恩恵を受けている。

「あ、あのね、私達、今度デートするんだけど……」

「場所が全然決まんねんだよ」

夏実に言わせては進まないと思ったのか、拓臣が代わりに言った。恥ずかしげもなく言えるあたり自分とは全く違う生き物だと羨望を抱いてしまう。

「だから、ラッキーなデートスポットとかわからないかな……と思つて」

ああ、何て微笑ましいのだろうか。

自分とは雲泥の差だと大輝は落ち込みたくもなる。

「あなた達、どこへ行っても上手くいくわ」

「本当？」

夏実がパツと顔を明るくし、それから拓臣と顔を見合わせる。

これぞ自分が望んだ青春だと大輝は思うのだ。ごく普通でいいのだ。

「でも、あなた、本当は遊園地に行きたいと思ってる」

夏実は恥ずかしそうに下を向き、自然に拓臣がその顔を覗き込む。

「そうなのか？ 一度も聞かなかったけど」

「羽佐間拓臣がそういうところは好きじゃないみたいだから言い出せない」

それは大輝も知っている。彼は女好きで騒ぎ好きと思われているが、自身は静かな場所を求める傾向がある。

「その男に遠慮なんて必要ないわ。あなたが手綱を握って、好きなだけ振り回せばいい。男は躰が肝心よ」

何て恐ろしいことを言うのだろうか。

彼女は冗談でもなく、真顔でそれを言っている。

「おいおい、変なこと吹き込むなよ」

さすがの拓臣も困り顔だ。夏実はと言うと俯いたまま黙り込んでいる。

「師匠の受け売り、男は最初に躰けておかないと後で大変なことになるそうよ」

「あー、それ、あたしも同意！」

ビシッと一樹が手を挙げる。その手には箸が握られ、立派なサイズのエビフライが高々と掲げられる。

（そりゃあ、あなたはそうでしょうよ）

そのツツコミはあくまで心の中だけにしておいた。

生徒会役員もとい一樹の下僕達は見事なまでに躰けられている。

「わかった！ あたし、頑張る！」

急に顔を上げたかと思えば夏実は拳を握りすっかりその気になっ

ている様子だった。

先が思いやられるものだ。拓臣が彼女を連れてくるのを渋ったのは、こういうことだったのかもしれない。

「お前……俺のこと嫌いだろ？」

「あたくしは誰も嫌いにならないわ。でも、そう見えるのは、あなたがあたくしを嫌いだからよ」

恨み顔の拓臣の視線を星羅は受け流して言い放つ。

してやつたり、そんな顔をしているようにも見える。

「えーっ、そうなの？ ひどい！」

「お前、徒花さんに何したんだよ？」

拓臣に食ってかかる夏実に大輝も便乗した。

「いや、何もしてねえって、なあ？」

拓臣は星羅に同意を求めるものの、普段の彼ならしないような判断ミスだとしか言いようがない。彼女に聞くのは大きな間違いだ。

「灰岡大輝と別れるように言われただけ」

空気を読まずにバラした星羅に今度は拓臣がガツクリと肩を落とした。

「お前……」

朝に押し掛けていると思ったら、そんなことを言っていたのか。

大輝としても初耳である。

「えーっ、灰岡先輩と星羅ちゃんって何かいいコンビだと思うなー！

本当に付き合っちゃえばいいのに」

「コンビって……」

何も知らずには連れてこられない。あらかじめ簡単に事情は説明したと言っているが、何か間違いがあったのではないかと疑ってしまっ。

「っーか、お前、ぜんぜん二人の絡み見てないだろ？ 悲惨だぞー」

確かにこの場で大輝が見せたのは一樹の尻に敷かれている様だけだ。

けれど、悲惨とは言い過ぎではないだろうか。しかし、親友を睨んでみてもその目に映るのは可愛い彼女だけなのかもしれない。

「女の勘です！」

「お前、こいつの影響だけは絶対に受けるなよ？ 絶対に、だ。《魔女》になるとか言い出さないでくれよ？ 頼むから」

そこまで言わなくても……、と思うのだが、夏実は影響を受けやすい質なのかもしれない。

星羅が二人になったらと思うと気が重くなる。

口にはできないものの、一番一樹の影響を受けてほしくないのだろつ。

「ナツミン、ナツミン」

ちよつとちよつと、と一樹は呼びかけ、夏実は首を傾げた。

「灰岡先輩違う」

「え……？」

「違いますよ」

夏実と一緒に大輝も困惑した。

違うわけがない。自分は灰岡大輝だ。

「ノンノン、タイプー」

一樹が立てた右手の人差し指を振る。

「だから、そのタイプーは勘弁して下さいって」

無駄だとわかっていても言ってしまうのは愚かなことだろうか。

一樹は聞く耳を持たない。

「リピート・アフター・ミー、タイプー」

いつから、ここは英会話講座になったのだろうか。

「タイプー……先輩」

恥ずかしそうに、あるいは困ったように眉を下げながら夏実が続く。ちらりと視線を向けてくるが、若干屈辱的なあだ名と親友の彼女の安全は大輝が天秤にかけるまでもないことだった。

「所詮、タイプーはタイプーなんだから恥ずかしがらずにもういちよ！ タイピー」

それはどういう理屈なのか、大輝としては甚だ疑問だが、彼女がこうと言ったらこうだと言う《三木一樹ルール》には従わざるを得ない。

「タイプー先輩」

うむ、と一樹は頷く。合格ということだろうか。

「そっちはタクミン」

ビシッと一樹が拓臣を指さす。拓臣は諦めたように黙っている。

「リピート・アフター・ミー！ タクミン！」

「タクミン！」

自分の彼氏なら遠慮はいらないうことなのか、もう夏実は迷わなかった。

「あたしのは親しみを込めて、かいちよーとお呼びなさい」

「はい、かいちよー！」

（順応早っ）

大輝は夏実が羨ましくなった。何と影響を受けやすい子なのだろうか。大輝もそうなれば、ここで肩身の狭い思いをせずに済んだかもしれない。

夏実は既に一樹に洗脳されたと思って間違いないだろう。

「で、お前は次どこでデートするんだ？」

幸せを分けてもらっているような微笑ましい気分だったのに、今日は親友が奈落に落としてくるようだ。

思い出したくないことを思い出してしまった。

「じゃあ、ダブルデートしようよ、星羅ちゃん！ かいちよーも一緒にどうですか？」

キラキラした目の夏実に星羅は少し戸惑っている様子である。

「ちげーよ、こっちじゃない方」

「え、タイプー先輩、二股？」

拓臣の指摘に夏実はぐるんと大輝の方を見る。ワナワナと震えているようにも見え、大輝は恐怖した。どうにも遺伝子的に女性に弱いようである。

「……あ、お前に言うのを忘れてた」

ふと、大輝は気付いた。肝心なことを拓臣にはまだ話していなかったのだ。

「ん？」

「徒花さんに会いたいわって言うから連れてくんだよ」

そりゃあやべえな、と呟く拓臣は険しい表情になっている。

「納得はさせたんだろ？」

「だから、ちゃんと会っておきたいんだって」

一樹が言ったように、納得したと言えば語弊があるのかもしれない。

「あ、タイプー、タクミンには言っただけじゃなかったんだ？」

「こいつ、ほとんど話にならない状態で、それから聞くわけにもいかない感じで、今日もこいつのことばかり聞くんで」

話したくない、話したくないと思っていた。

今日になって大輝は自分のことを振り払うように拓臣を質問責めにしていった。そうすることで今まで忘れていられたのだ。

「ちよつと待て、この魔女っ子とあの女を引き合わせたら、どんな爆発が起きるか……あー、頭いてえ。お前じゃねえのに頭いてえよ」
「大丈夫だよ。その辺、あたしが覚悟決めさせたから」

ケラケラと一樹は笑っているが、昨日のことを思い出せば、週末よりもそちらの方が恐ろしくなるほどだ。

「うまくやり過ぎせよ」

やはり、すんなり終わらないだろう。

拓臣が言うからにはそういうことなのだろう。

「そいつに言葉に気を付けろって言っても無駄だろうから言っておくが、もし、あいつの機嫌を損ねることがあれば、そんな時は『徒花星羅は偏屈で空気が読めなくて一言喋ることにみんなが気まずくなるような険悪な雰囲気作りの天才だ』って弁解しろ。いや、あらかじめ言っておけよ」

よくもスラスラと出てくるものだ。しかし、参考にしようとは大輝は思わない。昨日、一樹に言われて考えてはみたものの、全く言葉が浮かんでこなかったのだ。

思い浮かべただけでわかる。星羅と茉希は水と油だ。茉希の性格と星羅は合わない。

プライドが高く、いつも取り巻きを連れ、注目されたがる茉希にとって高慢ともとれる星羅の態度は許せないものになるだろう。

星羅が口調を変えることは全く期待できない。

大輝はそれをわかっている。けれど、わかっていない人間がこの場に一人だけいたのだ。

「ひどい！ 鬼！ 悪魔！ 人でなし！ ろくでなし！ 星羅ちゃんに全裸土下座で謝罪しろ！」

ボカボカと夏実が拓臣を叩く。その一撃一撃が何だか重そうだ。

「落ち着きなよ、ナツミン。逆DVは推奨しないよ」

その逆DVという言葉が最も似合うのが一樹なのだが、自分は例外だと彼女は思っているだろう。彼女の周りにはドMが集まるというのが星羅の談なのだから。

「そうよ、三沢夏実。あたくし、磔刑にされても火刑にされても羽佐間拓臣のストリップなんて見たくもないわ」

それはそれで話がズれていると思うのだが、星羅に言うだけ無駄だろう。

「それに、会長から同じこと入れ知恵されてるから」

「具体案出さなかったけどね。さすが、タクミン、えげつないねー」

あっはっはっは、と一樹は笑っているが、彼女も十分にえげつなかったと大輝は内心思う。

「星羅ちゃん、それでいいの？」

夏実の大きな目が不安げに揺れている。

「悪が必要なら、あたくしは喜んでなるわ」

「でも……」

「いつの時代でも《魔女》は悪でしょう？」

彼女は白魔女であって、黒魔女ではない。けれども、そんなことはどうだっていいのだと知っているのだろう。

区別するのは《魔女》側の人間だけだ。たとえ、彼女が誇りを持っているとしても、誰にもわからない。

《魔女》は《魔女》、黒猫を連れ、黒いフード付きケープをかけた不気味な少女でしかない。

そして、夏実も大輝も拓臣も、おそらく一樹も、星羅が背負って

いる物を知らない。

*

翌朝、拓臣は溜息を吐いた。

なぜ、自分はこつもお節介なのか。

「羽佐間拓臣、一つ聞いてもよろしいかしら？」

拓臣が声を発するよりも早く、星羅が拓臣を見上げて問いかける。

「何だよ？」

「あなたは毎度毎回あたくしを連行するのかしら？」

彼女は問わずともわかっているのではないかと拓臣は思う。

自分に言わせることに何の意味があるのだろうか。

それとも、何でも知っていると思うのは買いかぶりか。

「大輝にも他の奴にも聞かれちゃまずいことがあるんだよ」

「文明の利器というものがあるじゃないの」

星羅がポケットから取り出してちらつかせたのは黒光りする長方

形の 携帯電話であった。

すぐに認識できなかったのは彼女が所持しているなどは微塵も思っていないからだ。よく見れば、黒猫のストラップがぶら下がっている。

「お前、ケータイとか使えんのかよ？ それ、ジーさんばーさん用のじゃねえだらうな？」

失礼ね、と星羅は頬を膨らませる。

最近の言葉を使う上にデジタルな物も使うようだ。そう言えば、分室にはパソコンがあったな、と拓臣は思い出す。

「あたくし、三沢夏実とはメル友になったのよ」

「なっ、いつの間に……」

開いて見せる画面には確かに『三沢夏実』の名と番号、見覚えのあるアドレスが表示されている。

「大体、何でお前がメル友とかいう言葉を知ってて、さも当たり前

のように使ってたんだ？」

「それも、なぜ、自分の彼女とそんなことになっているのか、さっぱりわからない。」

「思い返せば、毎日何かと届いていたメールが昨夜はなかった。」

「拓臣は自分から送るタイプではない。特に心配もしていなかった。というのは嘘だ。昼のことが原因で機嫌を損ねたかと、らしくもなく不安になっていた。だが、自分から送るようなこともできなかった。」

「だから、こういうことだったのか、と思えば脱力する。」

「偏見だわ。あなたは、あたくしを誤解している。それが悪いとは言わないけれど」

「誤解しかしていないと拓臣自身もわかっている。」

「……気を付ける」

「何のことかしら？」

「あんたは自分の未来は見えないんだろ？」

「ええ、真っ暗。でも、ノスフェラトゥが守ってくれるわ、多分」

「猫に何が守れるんだと拓臣は思う。それに、彼女の腕はそのノスフェラトゥにやられた傷だらけだ。」

「市原はやべえ。どうにかやり過ぎせよ」

「言っただうにかなるものだとも思えないが、言わずにはいられない。」

「そこに全てがかかっているとんでも過言ではないと拓臣は思う。全ては彼女次第だ。」

約束のその日は朝から生きた心地がしなかった。

全ては星羅次第だと拓臣や一樹に散々励まされたが、それが不安の要因だと彼らもわかっていた。

星羅は爆弾だ。そして、彼らに言わせれば茉希も爆弾だ。

爆弾対爆弾、どちらが先に爆発しても大輝は死ぬ。身を守る術が大輝にだけ存在しないのだ。

ノスフェラトウがいれば、唯一の味方になってくれたかもしれないが、気まぐれな猫だ。それに、約束の場所には連れて行けない。

その約束の場所であるカフェで大輝は延々と「逃げ出したい」と思っていた。

心の中で何度も逃走をシミュレートする。

ボックス席の隣には流行最先端のファッションに身を包んだ茉希がいる。化粧やヘアスタイル、小物に至るまで手が抜かれておらず、最早雑誌のモデルと比べて遜色ないレベルだろう。

向かいの星羅はゴスロリファッションである。猫耳のついたフードを平然と被っているあたり、彼女は常に頭をガードしていなくてはならないらしい。だが、それが妙に似合っている。

先程から周りの視線が痛くて大輝は居たたまれない気分で押し潰されそうだった。とにかく目を引く二人なのだ。

大輝も茉希に恥をかかせてはいけないと散々言われ、ファッションには気を遣っているが、限界がある。

何を言っただいかわからず、無意味に水を飲んでしまう。

茉希が星羅を値踏みするように見ている。しかし、客観的に見ても星羅は茉希に劣っていない。大輝とてその手のブランド服は高いということは知っているが、服だけの問題ではない。それどころか彼女自体が圧倒的な存在感を持っていることだ。本当に魔女らしい

とも言えるかもしれない。

アイメイクで目力を増し、グロスで輝く唇は今正に生き血を啜ったかのような。妙な色気すら感じ、大輝は別の意味でドキドキしていた。

これは一樹が手を出したのではないかという疑いを覚える。星羅にここまでできるとは思えないのだ。

「話は大輝さんから聞いているわ。えーっと、占いが趣味なのよね？」

茉希が口を開く。大輝に進行をさせても無駄だと思っただろう。

星羅が先に口を開くはずもなく、会いたいと言ったのは茉希の方だ。しかし、この二人は待ち合わせ場所で会った時から不穏な空気を纏っていた。火花が散っていると言えば一方的なのだから語弊があるが、とにかくお互いに会わないというのは見た瞬間からわかっただろう。

「いいえ、認識の間違いよ。あたくしは魔女、それがあたくしの生業」

確かに茉希が間違っていると大輝も思うが、プライドの高い彼女にとつてミスを指摘されるといことは屈辱だ。もう少し言葉を選んでほしいものであるが、星羅がオブラートを持っているはずもない。

「どうして魔女になりたいの？」

大輝は心の中で頭を抱えた。激しく呻く。

説明したつもりなのだが、茉希は星羅のことを正しく捉えるつもりがないのかもしれない。これは、わざと仕掛けているのかもしれない。そうになると、非常にまずいことになるのは明白だ。

「それも間違いだわ。あたくしはもう魔女なの。ゆりかごから墓場まで、生まれた時から死ぬまで魔女なのよ。おわかり？」

茉希が唇を噛むのがわかってしまった。今の星羅の態度は普段の茉希の態度と重なるものがある。あまりに傲慢だ。

これは新手の拷問だ。最早大輝にはなす術がなく、二人の女の静かなる争いを見届ける以外にないようだった。

「誇りを持つているのね」

「誇り？ そんな言葉を使わないでちょうだい。魔女であることがあたくしの全て、これは業なのよ。あなたには理解できないでしょうけど」

いつになく星羅の言葉はきつい。

一樹が入れ知恵をしたのだろうか。それとも、拓臣か。考えてみてもわからない。むしろ考えなくなかった。許されるならば猛ダッシュで逃げ出したい。今ならば自己ベストが出ると断言できる。

「あなたの家族はどうしてるの？」

「市原茉希、あたくしの家族に何の関係があつて？」

あからさまに星羅は突き放す。その表情から茉希への軽蔑すら読み取れるような気がする。

仲良くしようという集まりでもないが、これはまずい。茉希に納得してもらおうという目的は確実に果たされないだろう。

「あ、徒花さんは家族の話が嫌いなんだよ」

何とか大輝は口を挟む。それがタブーなのは全くの嘘ではないのだが、最早手遅れだった。

「家族がいるのは当然のことかしら？」

「えーっと……聞いちゃいけないことだったみたいね。ごめんなさい」

誰もが両親といるわけではない。星羅は一度たりとも親戚のことは話さなかった。

親の顔が見てみたいという気持ちは理解できなくもないのだが、迂闊に聞くべきではなかった。

「あなた、そうは思っていない。心にもないことを平気で言える」

茉希の心を見透かす星羅の目に大輝はぞっとする。自分は見られたことがないから、そう思うのか。だから、怖いのか。

「そんなこと……」

「いいえ、あなたの心は丸見え。隠しても無駄よ」

否定しようとする茉希を遮って星羅がぴしゃりと言い放つ。その目からは逃れられないのだと大輝は思い知る。

だが、呆然と見ている場合ではない。

「ご、ごめん！ 徒花さんって偏屈で、空気全然読まないっていうか、一言喋るだけで気ますぐなるんだって！ 険悪な雰囲気作りの天才なの！ だから、連れてきたくなかったんだよ」

一樹や拓臣に言われた通り大輝は言う。言いたくなかったが、仕方のないことだ。

ちらりと盗み見た星羅も別段非難の眼差しを送ってくるわけでもない。

だが、茉希の方がぐるりと顔を向けてくる。その表情は険しい。

「そんな人と偽装でも付き合うなんて、あなたの品位はどうなるの？」

非難はこちらから来た。

逃げたい、逃げたい。大輝は何度も考える。

「ほら、目には目を、歯には歯を、って言うだろ？ だから、悪い虫には悪い虫をつていうか、殺虫剤として効果抜群だって言われたから……」

自分でも何を言っているかさっぱりわからなかった。

誰も助けてくれないのに、茉希の視線が研がれた刃物のように鋭さを増していく。

「そんなに知りたいのなら、あたくしの家族のこと、教えて差し上げるわ」

「もういいんだけど」

茉希が機嫌を損ねているのは明白だ。

天の邪鬼になるのもわかる。だが、星羅が止まるはずもない。

大輝には星羅が暴走しているようにしか見えない。彼女との付き合いは短く、その行動が読めるはずがない。元々が何を考えているか、さっぱりわからないのだ。

「祖父はどこかの道端で竹串をジャラジャラさせているらしいわ」
「竹串？」

何それ、と茉希の顔が歪む。完全に星羅を奇人変人として、不快なものとして見ているのがわかる。

「易者……ってことかな？」

「そうかもしれないわ」

星羅は他人事のように答えた。

「母はどこかで皆に母と呼ばれているみたい」

「何か教祖様とかじゃないのよね？」

問いかけながら、茉希はそうに違いないと思っているような気がした。

「あ、あれじゃないかな？ よく当たる占い師。 の母、ってやつ」

易者に占い師、彼女の家系は本物なのだと大輝は思う。

「兄は駅で手当たり次第に他人の手を握っているようね」

「何か選挙活動とか？」

「兄はまだ学生よ」

選挙活動なんかできるわけがない。けれども、今回ばかりは何なのか全く検討もつかなかった。

「じゃあ、お父さんは？」

祖父、母親、兄とくれば父親が気になるのは当然だ。

「父は消息不明。何も見えないわ」

大輝は何も言えなくなつた。

死別も考えていたのだが、想像してもいない答えだった。

そして、『らしい』『みたい』『よう』といずれも曖昧だ。

「つまり、あたくしの一家はとっくに離散したの。それぞれ、別の人生を歩んでいる」

それが『ほぼ天涯孤独』と言った理由なのだろう。

家族はいてもバラバラになっている。彼女はさざりと言うが、軽い事実ではない。

「……本当にごめんなさい」

こればかりは、本当に悪いと思ったのだろう。たとえば、ほんの少しでも、茉希にも良心はあるらしい。

「もう昔のこと、あたくしのせいだもの」

星羅は運命を受け止めている。

憐憫の情を受け付けられないかのように、凜然としている。

「あなたはどいう占いをするの？」

どうにか茉希は落ち着いたようだった。疑いがないとは言わないだろうが、今は占い師としての彼女に興味を持っている。

こんな形でなければ、二人がこれほどまでに険悪になることはなかったかもしれない。茉希は星羅が世話になっている占いカフェに行きたいとずっと言っていたのだから。

「タロットや夢占い、水晶を使うこともあるけれど……占いには興味があつて？」

「え、ええ、大好き。朝の占いのランキングは欠かさずに見てるの。大輝には星羅の態度が軟化したように思えた。茉希も同様だ。」

しかしながら、茉希の胸の内にあるのは同情だろう。何不自由なく生きてきた彼女にとって星羅のような境遇の人間は憐れみの対象でしかない。

可哀想な人間、そう思えば優しくもなる。けれども、それは慈悲ではない。見下して快感を得るためだ。

「なら、占って差し上げましょうか」

「本当？ 嬉しい！」

彼女は自分を作るのが上手だと大輝は改めて思い知る。見透かされていようと関係ないという厚かましさが発揮されている。自分の心の広さを見せようとでも言うのか、その裏にただで占ってもらえるという意図を隠したままで。

そんな様に星羅は目を細めていた。

「既に見えているものを黙っているのは、とっても大変なことだよ。ふふふふふつ」

そんな風に笑うのは悪い予兆だと感じる。今まで、そんな笑みを見たことがなかった。

彼女は何かを良からぬ物を見ている。大輝でもわかる。

聞かせてはいけない。言わせてはいけない。直感が告げているのに、女二人の前で大輝はあまりに無力だった。

「たくさんの棘があなたを突き刺そうとしているのが見えるわ。どれも小さな悪意、数えるのは面倒だけど、あなたは心当たりがあるんじゃないくて？」

その様は容易に想像できた。

「な、ないわ！ 失礼なこと言わないで！」

嘘だ。大輝は心の中で断言する。

それは拓臣も知っていることであり、おそらく一樹も知っている。親の前では猫を被り、弱者は踏み付ける。結局のところ、彼女の親も利益しか考えないような人間だ。

「礼を欠いてるのは、あなたの方だわ。不躰な視線にあたくしが気付かなかつたとも思ってた？」

ずっと不快な思いをしていたから彼女は傲慢な態度を取っていたのだろうか。

「因果応報、自業自得、悪因悪果、人を呪わば穴二つ……あなたの悪意が全部返ってくるわ。当然の報いよ。覚悟なさい」

「本当に失礼な人！」

「あたくしは見た通りを言っているだけ」

星羅には彼女が何であるかと関係ないだろう。彼女の家族に手を出そうと考えても既に一家離散している。ダメージを与えることはできないだろう。

「お、落ち着いて！ 徒花さんはアドバイスをくれるよ」

大輝は何とか宥めようとする。星羅は魔女であって、厳密には占い師ではない。

「あたくし、地獄に突き落とすのが役目ではないの。人を、一人でも多く救いたいと思ってるのよ」

「そ、それで、どうすればいいのかな？」

すっかり不機嫌が顔に張り付いた茉希の代わりに大輝は聞いた。

「おかしいわね、いつもは助言ができるのだけど……何も見えない

わ

その言葉は演技がかったている。初めから救済の手段など見えていなかったのだろう。おそらく救いようがない。先ほどの言葉通り彼女は報いを必ず受けなければならぬということになるのだろう。

星羅でも何も言えず、救えない人間がいる。考えれば当然のことかもしれないが、今まで行き当たらなかったことだった。星羅は万能ではない。

けれど、罪を償った先の救いもあるのかもしれない。もしも、茉希にも救われる道があるのなら、星羅にも救われて欲しいと思わずにはいらなかった。

「でも、これだけは言える。悪いお友達と遊ぶのはおやめなさい。悪いお友達というのはボーイフレンドのことね。かなり貢がせてると思うのかしら？ 体を安売りするものじゃない。あなた、灰岡大輝と結婚してもそういう関係を続けるおつもりね。だって、灰岡大輝はあなたには逆らえないもの。親の権力を翳して、家を盾にして、そういう風に虐げてきた。卑劣なやり口ね」

本日最大の威力を持つ爆弾が投下されたのがわかった。

とんでもない内容をよくもつらつらと嘔まらずに言えるものだ。

拓臣に散々言われ、大輝も茉希について想像していたことでもあるが、平静でいるのは難しい。

こんなところでその化けの皮を剥がす必要があるのだろうか。

「このインチキ占い師！」

茉希の手が水の入ったコップに手が伸びる。氷もほとんど溶け、膏を増した中身が星羅に浴びせられる。

顔に命中し、滴って胸元を濡らしていく。周囲は騒然とし始める。「だから、あたくしは魔女だと言っているじゃないの。占い師と言ったことなんて一度もないわ」

ハンカチで顔を拭いながら、星羅は茉希を見た。明らかな軽蔑、先程茉希が向けていたように見下す視線だ。

「私に恥をかかせたわね！」

もう一度、今度はアイスコーヒーが星羅に浴びせかけられる。

ハンカチが使い物にならなくなり、星羅は茶褐色の液体をボタボタと滴らせている。

「あんたは絶対に許さない！」

「茉希さん！」

捨て台詞を残して、茉希は去って行く。

大輝はどうしたらいいかわからなくなる。星羅に貸してやれるハンカチもタオルもなかった。

店員に頼もうとしたところで、星羅と目が合う。

「あなたは彼女を追いなさい。ここの支払いはあたくしが責任を持つてしておくから、早く行くのよ」

「ごめん！」

それは逃げなのかもしれない。けれど、そうするべきだとわかっていた。ここに残れば取り返しの付かないことになるかもしれない。彼女もそのことをわかっているだろう。だから、強い言葉で大輝を送り出した。

自分のせいで星羅は水とコーヒーを浴びる羽目になったが、そのことについては後にするしかない。

大輝が店を出て行った後で星羅の前にタオルが差し出された。

猫柄のそれは普段星羅が使っている物で、中でもお気に入りだ。見上げた先にいるのは店員ではなく、笑みを浮かべる美貌の青年である。

星羅は内心舌打ちをしたい気分だった。

肩まで届く蜂蜜色の髪、白く滑らかな肌、すらりと高い背に細身の体軀はしなやかそうで、一見すれば女性のようにも見える。

その笑みにどれだけの女性が虜になっただろうか。彼はわかっただけでやるからこそ質が悪いのだ。自分の魅力を理解し、使いこなす魔性の男とでも言うべきなのかもしれない。彼は麻薬に似ている。

「こんにちは、リトル・ウィッチ」

多くの女性が自分の名を囁いて欲しいと願う声で、彼は穏やかに嫌みを吐き出す。

他人行儀だ。星羅は思う。

彼とはほんの数時間前に会ったところだが、それ以前の問題だ。毎日を合わせているというのに。

なぜ、まるで偶然の通りすがりのように装うのだろうか。

普段は許してもいないのに名前呼びながら、外ではいつも《リトル・ウィッチ》とどこか含みを持たせて呼びかける。

困るわけではない。悲しいとも思わない。お互いに恋愛感情は一切ない。ただ単純に不愉快なのだ。彼が自分を嫌な気分させる方法を熟知していて、それを時折最大限に行使してくる。

「君に水難の相が出ていると教えたかったのだけど、遅かったみたいだね。師匠渾身のメイクが台無しだ」

クスクスと彼は笑う。遅いも何も彼は事前に防ぐ気はない。いつもそうだ。

わざわざ星羅の一番お気に入りのタオルを持ってくるあたり、嫌

がらせとしか思えない。否、嫌がらせ以外の何物でもないのである。甘いマスクで優しい声で囁きながら、穏やかに装いながら、彼は生まれながらのサディストだと断言できる。特に最近は妹弟子をいじめることを日々の日課としている。

「あなた、休憩時間にあたくしを笑いにきたのね？」

彼はカフェの人気ナンバー2だ。好き勝手にフラフラできるはずもない。こんなことのために労力を惜しまないとは趣味が悪いことだ。

「まさか、僕は君を助けたいと思ってる。本当だよ？」

嘘だ。星羅は思う。この男は見えにくい。けれど、大輝とは意味合いが異なる。だから、面倒だ。

「それに、行ってきていって言ったのは師匠だよ？」

「でも、助けられないのなら、それはあたくしが助かる運命ではないということね」

助ける気がないというのはわかっている。たとえ、彼が助けようとしても無駄なのだろうが。

「さあ、一緒に帰ろうか」

結局、店員に詫びて、代金まで彼が支払ってくれた。

何を考えているのかわからない。彼には何の関係もないことだ。確かに彼は星羅よりもずっと稼いでいる。

星羅は学生だが、彼は社会人だ。当然と言えば当然だが、メリックトはないだろう。見物料のつもりだろうか。

「今のままだと君はよくない方向へ行く。愛していないなら、あの男はやめた方がいい。今すぐに離れなきゃいけないよ」

普段は何かが見えたとしても結果が出るまでは絶対に教えてくれないくせに何のつもりなのだろうか。

「彼、あたくしと不幸を前提にお付き合いしたいと言ったの。だから、あたくし、不幸になるわ」

「幸せにならなきゃいけないなんて言うつもりはない。誰にだって

約束されたものじゃない。でも、君は本当に真つ暗のままでもいいの？ その闇が振り払えるものだって言うのに、いつまでもこのままでいいの？」

愚問だ。いいに決まっている。纏う黒は暗闇を受け入れるための色だ。けれど、黒魔術には手を染めない。

彼にはわかるだろう。けれど、彼にはわからないだろう。

「それで彼が救われるならいいわ」

「馬鹿だね、君は。君にとって何にもならない。不幸なんて望んでなるものじゃない。今、彼と離れば、少しは真つ暗じゃなくなるよ」

師匠にさえ説教をされたことはなかった。今のままでいいと言ってくれた。それなのに、彼は何のつもりなのだろうか。

「あなただって、黒い影が見えるわ」

それは漠然としたヴィジョンだ。彼がどれほど心に覆いをかけようと、不運の運命までは星羅の目から隠すことはできない。

「それは、君にも降りかかると予言するよ」

「なら、あたくしは、それを甘受するわ」

恐れはない。償いができるならば、いくらでも不幸になる。それが当然の報いだ。既にそれほどまでの大罪を犯してしまっている。

「星羅、みんな、危ないんだよ。もしかしたら、現代の魔女狩りが行われるかもしれない」

「魔女狩り？」

星羅は首を傾げる。子供を諭すように彼は言う。穏やかな声音で、けれど、緊張感を持って不穏なことを口にしている。

「隷属か、滅亡か」

「物騒じゃないの」

普段の会話で聞く言葉ではない。何者かが利用しようとしているということだろうか。

「いつの時代も魔女は生きにくいものだよ。当たってる内が華。不都合が生じれば気味悪がられて消される」

彼自身にも関わることだろうに、重みがない。

彼もまた破滅を受け入れる人間だ。星羅に見られることを嫌がって防護壁を作って、そのくせ他人のことは見たがる。助けもせず傍観を決め込む。

「あたくし、悪女にだけはなりたくないわ」

茉希を思い出して星羅は呟いてみる。彼女の未来はおぞましいものだった。

「君はなれないよ、優しいリトル・ウィッチ」

思い知らせるように名を呼んでいたかと思えば、また嫌みに戻る。そこで星羅はぶいっと顔を背けた。もう家は目の前だった。

「はははははっ！ 最っ高！ やるなあ、魔女っ子！」

腹を抱えて椅子から転げ落ちるのではないかと思うほど拓臣は大袈裟に笑った。大爆笑である。

「笑い事じゃないって」

大輝としては笑える話ではない。全くもって笑えない。

一昨日、茉希と星羅との三者面談のことだ。メールでも連絡したが、直接聞きたいと拓臣が言ったのだ。

「でも、実際、市原が清く正しく美しいお嬢様だなんて思っちゃいねえだろ？」

初めからわかっていたことだ。今更、言われなくともわかっている。彼女が清く正しく美しい大和撫子であったならば、大輝はこんな状況に追い込まれていないだろう。それこそ、政略結婚でも構わないと思えていたかも知れない。

「そうだけどさ……結婚は絶対にしなきゃいけないんだ」

両家の利益のため、あるいは、灰岡家の安寧のため、大輝は自分を犠牲にしなければならぬ。完全なる人身御供である。差し出されるのは彼女の方、けれど、犠牲になるのは不思議なことに大輝の方だ。

「お前のこと随分気に入ってるみたいだしな」

両家の発展のため、彼女はそれを受け入れる。初めからそうだった。彼女が自分に執着する理由が大輝にはわからない。

「大体、お前は、徒花さんのこと嫌ってただろ？」

大輝はなぜ拓臣がこれほどまでに楽しんでいるのかわからない。状況は明らかに悪くなった。あれから、茉希のご機嫌取りが大変であった。星羅とは別れるように言われた。そして、近々婚約を発表すると。

「そんなこともあったような、なかったような……」

拓臣の目が泳いでいる。絶対にやめると言ったのは誰だっただろうか。

「俺は徒花応援団第一号なんだ」

「何だ、それ」

いつの間にかそんな物が結成されたのだろうか。一体、何を応援するのだろうか。

「二号は夏実な」

「会長忘れたらヤバいだろ」

一樹を差し置いて一号を名乗るのはどうだろうか。

それとも一号と団長は別なのだろうか。

「会長は会長だから」

「そういうものか？」

「後援会のな」

大輝は脱力した。本当に一樹は一樹だった。後援会という辺り、彼女の力の入れ方を感じる気がする。

きっと応援団とは規模も権力も資金も全く違うのだろう。生徒会の全員は強制的に入れられているに違いない。

「あのさ、俺、今日は昼……行かないから」

「何だ何だ喧嘩か？」

拓臣は笑っているが、察しているだろう。

「顔、合わせ辛いし、会長のテンションについてける自信ないし」

一樹のテンションがいつでも高いわけではないが、怖い一面を見せられるのも困る。

「じゃあ、三人で食うか。俺と夏実とお前」

「いいよ、俺は一人で」

気遣いはありがたいが、今は幸せな二人といたい気分ではない。

一人になりたいのだ。拓臣と夏実のバカップルぶりを見せ付けられれば当たってしまう可能性がある。たとえば、二人が気を遣ってくれたとしても。

「魔女っ子と喧嘩したか？」

「あれから話してない」

喧嘩というほどのことではない。彼女と何か言葉を交わしたわけではない。

彼女は悪くない。ああなることは絶対に避けられなかった。

むしろ、彼女に迷惑をかけてしまった。

でも、そうではない。そうではないのだ。

「八つ当たりはやめろよ？」

「お前に言われたくないよ」

星羅にきついことを言っていたのは彼の方だ。朝、彼女のところに行っているという噂があったかと思えば、別れるなどと言っていたというのだから彼には言われたくないものだ。

「わかっている。でも、違う問題なんだ」

彼女が言ったことは問題がないと言えば語弊がある。けれど、大輝はむしろ自分が言ったことに負い目を感じていた。たとえ、それが一樹や拓臣からの入れ知恵で、本人もわかっていたことだとしても。

「何か吹き込まれたか？」

「確認しなきゃいけないことがあるんだ」

吹き込まれたことは事実だ。昨日、茉希からメールがあった。

星羅とは別れるということ。そして、それは彼女を悪役に仕立てた上でにしろということだった。

つまり、彼女に脅されて付き合っていたということにしろと言うのだ。理不尽にも程があるが、それが彼女の家のやり方なのだ、これまでも思い知らされてきているからこそ驚きもなければ、抗議の声も出せない。

星羅を悪役にしたくはない。不幸を前提に付き合ってくれと頼んだのは大輝の方だ。

一樹に相談したいことがある。けれど、まずは星羅だ。

「あいつの言うことだけは真に受けるな。絶対に信じるな」

わかってるよ、と返事を返す。ただ、なぜ、こんなにも胸の内に
蟠る物があるのかわからないだけだ。

苛立っている。その理由が自分でもわからない。

放課後、分室には予約が入っていて、大輝は図書室で時間を潰してから誰もいないのを見計らって行った。

星羅はいつものように大輝を迎え入れるが、それが複雑な思いを抱かせる。

大輝は軽く挨拶を返し、鞆の中から封筒を取り出して星羅に差し出す。

「何かしら？」

星羅は首を傾げる。様子がおかしいとすれば間違いなく大輝の方なのだから無理もないだろう。

「お茶代。ほら、代わりに払ってくれたら？」

あの時は急いで茉希を追わなければならなかったが、本来彼女に支払わせるつもりはなかった。

男が支払うべきだという意識が大輝の中にもある。特に、星羅には自分の望みのためだけに迷惑をかけている。

「あれは、彼女を怒らせてしまったお詫びでもあるわ」

星羅は決して手を着けようと思わない。本気でそう思っているのだろう。

「彼女、癩癩持ちで、どの道怒ってた気がするし、クリーニング代も含めて受け取ってくれないかな？」

黒だから目立たないという問題ではないだろう。

「これをきっかけに、またあたくしをあの悪女の前に引きずり出して謝罪させるおつもり？」

星羅がじつと見つめてくる。今はその視線が苦しかった。

「そんなつもりじゃないよ。どうせ、謝る気なんてないんだろ？」

彼女が謝る必要はない。彼女が見えた通りのことを言ったのは事実だろう。大輝にも容易に想像できるヴィジョンだった。

彼女は多くを踏み付けてきた。いつ、その土台になった者達が牙

を剥いても不思議ではないくらいだ。

「あたくしは、自分が見た物を偽ったりしない。ただ、それだけ」
「わかってる。わかってるよ。君と彼女を会わせたら惨事が起こるような気はしてた。ううん、起こらない方がおかしいくらいだよ」
「掴み合いの喧嘩にならなかつたことに安堵しているほどだ。」

「あなたも魔術師になるのはいかが？ 誰でも簡単になれるものよ。必要であれば、知り合いを紹介するわ。いけ好かない男だけれど、一流の魔術師がいるのよ」

男、その単語に大輝の心臓がびくりと跳ねた気がして、無意識に拳をぎゅっと握り締める。

「あの、徒花さん。何でも話す仲じゃないのはわかってるし、始めに確認しなかつた俺も悪いけど……」

喉がカラカラに渴く。そっとポケットの中の携帯電話に触れる。

「……その、付き合ってる人いたりしないかな？」

何かの間違いだとわかっているのに、ひどく聞き難かった。声が妙に震えてしまっている。

それなのに、星羅は変な物を見るようにして、それから大輝を指さした。

「ほ、他につてこと！」

こんな時にボケないでほしい。そう思う。大輝は真剣に聞いているのだ。確かに言葉は少なかつたかもしれないが、理解してほしかつた。

けれど、彼女ならばわかってくれるだろうというのは押し付けに過ぎない。彼女には見えない、その事実が悲しい。

「いないわ」

そう聞いて安心しているのは心の半分にも満たない部分だった。それ以上に納得できていない。

拓臣の言葉がリピートされるが、鵜呑みにしているわけではないのだと自分に言い聞かせる。

「徒花さんってお兄さんは一緒に住んでないんだよね？ 一人だけ

「だよな？」

「ええ、どこかの駅で手当たり次第他人の手を握っては声をかけているらしい兄一人しかいないけれど、行方知れず、音信不通よ」

「厳密には何をしているかわからない。そういうことだろう。」

「大輝の中で一つの希望的な可能性が消える。元々、薄すぎる望みだった。」

「灰岡大輝、はっきりと聞いてちょうだい」

「星羅は焦れたようだった。」

「何だかイライラしながら大輝は携帯電話を取り出して、メールを開き、添付画像を見せる。」

「この人誰？ 同棲してらって本当？」

「自分でも言葉がきついと気付いた。けれども、苛立ちは増すばかりだ。」

「星羅はそつと目を伏せ、大輝は後ろめたいことがあるからだと思わずにはいらなかった。」

「写真には若い男と並んで歩く星羅が写っている。隠し撮りだが、わかる。」

「蜂蜜色の髪のもとても綺麗な男だ。背が高く、洗練された雰囲気。不鮮明で小さな画像の中の横顔からでも感じ取れる。彼は甘く微笑んでいる気がした。明らかに兄という雰囲気ではない。」

「……あの悪女の仕業ね」

「見破られた。だが、そんなことは問題ではない。今、問題は星羅の方にある。」

「徒花さん」

「今度は大輝が焦れる番だった。」

「一緒に住んでいるわ」

「拳を握り締めれば爪が皮膚に食い込むが、そんな痛みは感じられなかった。」

「その男は鳳玲ほうれい。あたくしと同じように占い師と呼ばれることを好まない魔女……いいえ、男だから魔術師ね」

魔術師、星羅にぴったりだと大輝は思う。

優しい男なのだろう。大輝のように不幸にするとは言わないだろう。

「この時は師匠に買い出しを言い付けられていたの」

買い出し、本当にそうだろうかと疑わずにはいられない。

「つまり、鳳玲はあたくしと同じく下宿している兄弟子」

それだけよ、と彼女は言う。けれど、それは全ての否定にはならない。

同じ人物に師事し、一つ屋根の下に住んでいるからと言って全く何もないという証明にはならない。

それに、写真は一枚だけではなかった。

なぜ、何でもないと思えないのだろうか。不思議だった。

「急にふざけたかと思えば、こういうことだったのね」

何かを納得したように星羅が溜息を吐く。

大輝はただ自分の中のモヤモヤを消し去りたくて机を叩いた。

それからもう一枚の写真を彼女に見せる。玲が星羅を抱き締めている写真だ。これがあるせいで買い出しだけとは思えないのだ。

星羅は心底嫌な物を見るような目をして、画面から顔を背けた。

「鳳玲は、あたくしの不運を予知しては黙って傍観しに来て笑っているような男よ。本当は救うことよりも高みの見物が趣味なのかもしれないわね。その上、自分の心にはシールドを張り巡らせて誰にも悟られないようにしている。それを男として見るなんて、これほどおぞましいこともないわね。この男は本物のドSよ。天性のサディスト、鬼畜。店での顔は表側、見た目だけが綺麗なスイーツ、胃がもたれるような凶悪な中身を隠してる。あたくしにだけそういう態度を取るから同族嫌悪なのかもしれないけれど。でも、カフェでは人気も実力もナンバー2、ナンバー1の師匠は格が違いすぎるから、それを除けば実質的なトップ。結果については信頼できると認めるわ」

つらつらと星羅は早口に言った。

大抵、彼女は悠然としていて、たまに普通の女の子のような面を見せ、笑えないようなボケをする。

けれど、これはまた新たなパターンに思えた。茉希に対するようなあからさまな非難はない。

先程彼女が紹介すると言った男だと思っただろう。

同類として、兄弟子としては嫌っているわけではないようだ。尊敬している部分もあるのかもしれない。ただ、自分に対して優しくないことに不満を持っている。全て本心だろう。

「これは尾行に気付いていてわざとネタを提供したということ。この後、あたくしが思いつきり足を踏み付けたのだけど、その写真はなしのかしら」

「そ、そうなんだ……」

星羅はしたたかなところがある。本当に踏み付けたのだろう。茉希はそんなところを撮ったりはしないだろう。自分にとって都合のいいところだけ記録する。

「一昨日だって、あたくしのお気に入りのお気に入りのタオルを持ってあの喫茶店に来たのよ？ その後で水難の相が出てるって教えに来たなんて白々しいにもほどがあるわ」

星羅が嫌がるのも何となくわかる気がする。実際、目にしなければわからないが、鳳玲という男は星羅を本当に嫌っているわけではないはずだ。一樹が大輝をいじって遊ぶようなものに違いない。

一度は会ってみたくもしいかもしれないと思えば体の力が抜けていく。妙に安心している。茉希が吹き込もうとしたことなどどうでもいいのに、写真だけはショックだった。それが、なぜなのかわからない。

ただ星羅の言うことは作り話ではないと思った。

「お座りになつたら？」

「いいの？」

問えば、星羅は不思議そうに大輝を見る。なぜ、聞かれたのかわからないという顔だ。

彼女は余程のことがなければ他人を嫌いにならない。怒らない。だから、大輝の苛立ちも不躰な質問も何も気にしていないだろう。何事もなかったかのように接する。

星羅にハーブティーを入れてもらえばほっとする。

苛立ちが嘘のように消えて行く。手作りだからこそ、彼女の優しさが体に染み渡る気がする。未だ現場に出くわしたことはないが、校長が常連になっていくというのもわかる気がした。

彼女はまるで殉教者だ。けれど、大輝は彼女に不幸になってほしくないと思う。それを前提とした付き合いを前提としたのは自分で、その提案の理由もわからなくて、今は全く逆のことを考えている。

時折、思うのだ。彼女が本当に自分の彼女だったなら良かったかもしれない。茉希のことで悩まされながらも今正に青春していると感じるのだ。束の間であってほしくないと思う。

「あのさ、徒花さん。本当に彼女との婚約を円満になかったことにすることはできないかな？」

茉希が本当に望んでいるのなら彼女は縁を切ることはできないと言っただろう。だが、茉希と直接会ったことで何かを見たのではないかという期待があった。

すると、星羅は難しい顔をした。

「今すぐには無理ね。でも……あなたの未来に彼女はいないような気がする」

「本当？」

星羅の言葉は曖昧で、けれど、大輝に期待を抱かせるには十分だった。

「何も見えないから……けれど、彼女の未来にあなたは見えなかった。彼女のこと、棘ばかりで、その先ははっきりと見えただけではないのだけ……」

星羅は茉希を見た。それもまた目的ではあった。

「でも、あなたのことについてはあんまり期待しないでちょうだい。あたくしも勘に頼るしかないのよ。一度師匠や気乗りはしないけれ

ど鳳鈴に聞いてみれば、もつと道が見えるかもしれないけれど……
あたくしは、とっても未熟な魔女なのよ」

星羅は苦しそうな表情で、机の上に視線を落とした。

彼女の苦悩の原因は自分だ。そう思うと大輝は何かしてあげたく
なってしまう。

「あのさ、今度埋め合わせさせてくれないかな？ スイーツのバイ
キングとか興味ある？」

「お断りするわ」

悩む間もなく即座に返された答えに大輝はショックを受けた。

いつも一樹とお菓子を食べている星羅だ。当然興味はあるだろう
と思っていた。

「あなたはあたくしを利用するだけ。不幸にすることだけ考えてい
ればいい。あたくしなんかと外で必要以上に一緒にいれば面倒なこ
とになるわ」

じつと星羅は見つめてくるが、その目は冷たく見えてしまう。

「会長が一緒でも？」

「ええ、三木一樹が一緒でもよ」

また大輝はショックを受けた。一樹が一緒なら了承してくれるだ
ろうという期待があった。

「拓臣や夏実ちゃんが一緒でも？」

「あたくし抜きで行ってちょうだい」

一樹を連れてあのカップルと一緒にスイーツバイキングに行くこ
とを考えると胃もたれがする。

連れて行く代わりに買ってくれればいいか、と大輝は思う。彼女に
何かをあげたい。だが、彼女は受け取ってくれないかもしれない。
なぜ、そこまで思うのかはわからないが。

「これ、差し上げるわ」

星羅がポケットから何かを取り出して、大輝の方に差し出してく
る。

「飴？」

「レモンの飴は持つておくといいわ。気分が悪くなった時に効くから」

黄色い包装に入ったレモンキャンディーが三つ目の前に並んでいる。普段、彼女は携帯しているのだろうか。

「俺はそんなに飴舐めないし、気持ち悪くなることも……」

「あなたに必要な気がするから差し上げるのよ。本当に必要な時に使うのよ」

「わかった。もらっておくよ。ありがとう」

その時に見極められるのかはわからない。けれど、大輝はそつとポケットにしまい込んだ。

「話は済んだ？」

急な声にビクリと肩を跳ね上げ、振り返れば入り口に寄りかかるように一樹が立っている。その斜め後ろには珍しく一樹の右腕とも言える副会長の蕪木久弥かぶらぎひつよしが立っている。

大輝は慌てて席を譲れば「うむ」と頷いて一樹がそこに座り、部屋の隅に久弥が静かに立つ。

そして、大輝はいつも通り正座だ。

「タイピー、今日から一人で帰りなよ。星羅はあたしが護送するか」

「え？」

まさかそんなことを言われるとは思わず、大輝は驚いた。全くの予想外である。

その上、随分と物々しい言い方だ。星羅も何も反論しない。

「星羅は目を付けられた。だから、ケリが付くまであたしが守る」

「それなら、俺が」

守るといふのなら、大輝にもできるはずだった。力不足だとは思わない。

「タイピーには無理だよ」

「いや、でも」

きつぱり言われて、それでも大輝は食い下がる。それを一樹は許さない。

「もう一度言う。タイプーみたいな軟弱野郎には無理。絶対無理。

誰が何と言おうと無理無理。あんたもそう思うよね？ 久弥」

酷い否定のしようだった。その上、いつもはキューピーなどと呼んで泣かせているくせに一樹は珍しく彼を名前で呼ぶ。

「……ええ、若がおっしやる通りにございます」

久弥が口を開いた途端、空気が重くなる。

『若』と言うと余計に極道っぽいのだが、一樹がそう呼ばせている。そういう物が好きなのか、本当に堅気でないのかは今のところわかっていない。

「大体、ケリなんて……」

付けられるのだろうか。大輝は思う。茉希に手を出すと大変面倒なことになる。市原の家自体がアンタツチャブルな存在であり、大輝もある意味では人身御供のような物であったりする。

灰岡と市原が手を取る。それが最善とされている。

「あつちが仕掛けてくるなら、あたしの出番だ。ぶっ潰してやるよ」
「そ、そんな……」

「あちらさんはそれだけのことしてんだよ。他人を潰してきた奴は潰される運命にあるんだよ。ペっちゃんこになっちまえばいい。ペラッペラの紙切れ一枚になったらケツくらい拭いてやるさ」

一樹自身傍若無人と言われ、他人を巻き込むが、不思議と憎まれない。大輝も好きか嫌いかならば好きだと言える。彼女は悪いことは悪いとわかっている。

「若」

「三木一樹」

ヒートアップして言葉が荒っぽくなってきた一樹を宥めるように久弥と星羅が同時に声を発した。

「市原んところは先祖代々やり方が汚いから泣いてきた奴がいっぱい

いる。ここらで退場してもらおうがいい」

「物騒なことを言いますね」

一樹が言うことは事実だ。灰岡の家も市原を抑えることはできない。

「別に裏から手回して社会的に抹殺するって言うんじゃない。戦争するつもりもない。奴らがしてきたことを白日の下に晒してやろうってだけ。償いはしてもらわないと」

「悪意を持って登れば転落する山があるのよ」

その山の名は何と言うのだろうか。権力だろうかとぼんやり考える。

「最近、変な奴らがこの辺でうちの生徒に聞き回ってるって言う話もあるから気を付けなよ？ 市原とはまた別にさ」

それもまた物騒な話だった。一体何を知りたいのだろうか。

考えたところでわかるはずもない。たとえ、聞かれたとしても逆に聞き返すことはできないだろう。遭遇しないことを祈りたかった。

寂しすぎる。

大輝はとぼとぼと歩いた。今日は朝方雨が降り、自転車ではなく、徒歩と電車だ。

いつも通り星羅を送り届けるには都合がいかもしれないと思っていた。自転車で帰るには駅方面にあるカフェは遠回りになる。

しかし、何の意味もなくなってしまった。駅への道を一人で歩くのは寂しい。

駅には人が多い。たまに電車で通学することもあるのだが、いつも以上に気が滅入ってしまう。

はあ、と溜息を吐く。その瞬間、手を掴まれた。何かと顔を上げれば青年が立っている。全く面識はない。

「すみません！ 手相の勉強してるんです！ お時間とらせませんから見させてください！ お願いします！」

懇願だった。もうこの手を離さないとばかりに両手でギュッと握られている。切実な様子だった。

「手相……」

「お兄さん、浮かない顔してるから、俺が幸せになる方法探します！」

ニカツと青年が笑う。片手を放して胸を叩いて「俺に任せてください！」と言う。

そこで大輝はふと思い出した。星羅の兄は駅で手当たり次第に手を握っているという。もしかしたら、この男なのではないか。

「あ、あの、いつもこういうことしてるんですか？」

「ん？」

「駅で色々な人の手を握って」

「うん、そうだよ。俺、勉強中だから色んな人見ないと！ もちろ

ん、お代はいただきますせん！」

その顔もよく見れば、星羅と似た部分があるような気がする。
大輝は邪魔にならないように端の方へ青年を促す。

「あ、あの、もしかして、徒花って名字だったりしませんか？」
「んん？」

青年が首を傾げる。そもそも、徒花などという名字がそうそうあるはずもない。名字らしい名字でもない。

大輝は更に続けた。

「徒花星羅さんのお兄さんとか……」

「うわああああああ！」

核心に触れた瞬間、青年は急に叫びながら頭を抱えてしゃがみ込んだ。

「え、ちょ、ちよつと、大丈夫ですか!？」

なぜ、急にこんなことになってしまうのか大輝にはわからない。
当たり前でも想定外の反応だった。

青年はしゃがみ込んだまま、どこか苦しげにしている。

「い、息ができない……」

か細い声と言う。涙目で青年が見上げてくる。

「ど、どうしたらいいですか？ 薬ですか？ 救急車ですか？ え
っと、どなたかお医者様はーとかですかね!？ ど、どうしよう……
……!」

大輝も完全に取り乱していた。最早、自分でも何を言っているかわからない。パニックである。

「あ、飴ちゃん……」

青年が自分のポケットをぽんぽんと触っている。

「れ、レモンのキャンディー……な、な、な、ない!」

本当に青年は苦しそうで手を口で押さえ、今にも吐きそうな顔をしている。頼りにしている薬がないような、絶望的な表情だ。

そこで大輝は思い出して、今度は自分のポケットを漁る。レモン

のキャンディーと言えば貰ったばかりだ。

「これ、どうぞ」

星羅から貰ったレモンの飴を差し出す。必要な時に使えと言われたが、それは間違いなく今だろう。

青年はそれを受け取ると慌てて口に放り込み、それから暫く沈黙が流れた。

「た、助かったー。君、いい子だね。レモンの飴はいいんだよ。効果覲面なんだよ。まずい薬より全然効くんだよ。偉い偉い」

何事もなかったかのように青年は立ち上がり、笑った。本当にけろりとしている。だが、演技などではなかったのだろう。

「星羅さんも言っていました。彼女からもらったんです」

大輝はこの男が星羅の兄であると確信していた。駅で手を握っているということ、そして、レモンのキャンディーが繋ぎ合わせる。

「そつか……さっきは取り乱しちゃってごめんね。俺は徒花睦月^{むつき}。星羅ちゃんのお兄ちゃんです。ツッキーって呼んでね！」

取り乱したかと思えば、今度は平然と兄だと言う。

「俺は灰岡大輝です。徒花さんの先輩で、一応、訳ありなんですけど、お付き合いらすることになってます」

「わお！ 星羅ちゃんのカレシ君！ イケメンさん！ ワーオッ！」

飴を舂めるだけで死にそうな状態からこうも復活できるものなのだろうか。すっかり睦月のテンションは上がっている。

「いや、俺、婚約者のなものがいる身で……」

星羅の兄と発覚した今、それを言うのは辛い。

「星羅ちゃんのこと、利用してんのね」

「す、すいません……本当に申し訳ないと思っています」

深々と大輝は頭を下げる。言葉通りの気持ちでいっぱいだった。

普通ならば、ここで殴られても不思議ではないし、大輝も受ける覚悟はあるのだが、睦月はなぜか横揺れしている。ゆらゆらと左右

に振れているのだが、どういう意味のある動作なのか当然大輝にはさっぱりわからない。

「あ、そういうのやめて。俺、別に責めてないから。星羅ちゃんが選んだことには何も言いません。そんな権限俺にはありません」
「は、はあ……」

尚も揺れながら睦月は笑った。よくわからない男である。性格的な面では、とてもあの星羅の兄とは思えない。

そもそも、なぜ、揺れるのか。大輝は聞いてみたいが、できなかつた。

「とりあえず、どっか行く？ 行っちゃう？ 喫茶店とかでじっくり見ちゃうよ？ 将来の弟よ」

ふはははは、と睦月は笑っている。当初の目的を忘れていないのか、しっかりと手を握られ、連れて行かれる。

男に手を握られ、大輝は周囲の目が気になるが、睦月はまるで気にしていないようだった。彼にとっては、いつもやっていることに過ぎないのだろう。

将来の弟ということについて言いたいことがあるのに、彼は聞いてくれそうもない。彼もやはりマイペースだ。

「俺のことがわかるってことは、星羅ちゃんから、うちの家族のこと、少しは聞いたんだよね？」

喫茶店でご機嫌にオレンジジュースを飲みながら睦月は言う。

「お兄さんのこと、駅で手当たり次第に他人の手を握ってるって…いや、今日やっとその意味がわかったんですけど」

「手相の勉強中なのね、俺。占い師を目指す学生さんだから」

茉莉の予想は全くの見当違いだったということだ。けれど、納得できる。

「一家離散って聞きました。後は竹串とかどこかの母とか……」

「おじいちゃんが易者でねーママもねー占い師なのね。みんなにお母さんって言われてるのね。ちょー凄いの」

そこは間違いなかったようだ。

「でも、お父さんは消息不明って……」

それは非常に言い難かったのだが、睦月は首を傾げる。体ごと傾いている。

「ん？ パパも現役占い師だけど」

「そうなんですか？」

睦月の方が不思議そうだ。どうやら彼は家族のことを知らないわけではないようだ。

「そうそう、オカマバーにいるよ」

「お、オカマ……？」

大輝は耳を疑った。睦月はさらりと何を言ったのだろうか。オカマとはあのオカマなのだろうか。

「うん、パパもママになっちゃってさ。いや、俺、オカマとかニコハーフとかオネエとか女装家とかよくわかんないんだけどね、そんなん」

「は、はあ……」

睦月は何でもないことのように言うが、星羅もそうだとはい限らない。

本当に見えなかったのか。言いたくなかったのかはわからない。けれど、認めたくないのだとしたら気持ちわかる。

「でも、女装なら俺もしたいなあ。そんでね、星羅ちゃんと一緒に面白い物するの。姉妹とか親友みたいに」

睦月はのほほんと言う。本気でそう思っているようだ。

確かに彼は星羅に似て、あまり男らしい感じもない。星羅が隣を歩いてくれるかは別として、きちんとやれば見られるものにはなるはずだ。

「に、似合うと思います」

「ほんと?」

「ええ、全然大丈夫だと思います」

尤も、星羅がどういう反応をするかは大輝には想像できなかった。

「あ、星羅ちゃんに、みんな元気よー、って言うといてね」

どこまでも睦月は軽かった。けれど、次の瞬間には少し顔を曇らせた。

「星羅ちゃんが悪いわけじゃなくて、俺達が星羅ちゃんを商売しようとしたら、なんか大変なことになっちゃっただけで、離散って言っても、こう一時的にみんな反省しましよー的な? だから、絆がぷつぷり切れちゃったわけじゃないんだよ。パパとママっていうかママとママも離婚してないし。むしろ、ラブラブだし、より愛が深まっちゃったらしいし。星羅ちゃんは責任感じてるみたいだけど、俺達、欲出すとダメになっちゃうみたいでさ。能力の悪用、私利私欲のための利用禁止的な? だから、星羅ちゃんには本当に辛い思いさせちゃってるよね」

星羅は自分のせいで一家が離散したと言った。それを罪と感じるからこそ、償いをしなければと思いつけているのだろう。けれど、それは彼女の思い込みに過ぎないのかもしれない。むしろ、

少なくとも睦月に星羅を責める様子はない。むしろ、自分の方を

責めているのかもしれない。

大輝にはほつとしたことがあった。完全にバラバラになったわけではない。今でも彼らは繋がっているのだろう。その証拠に星羅は家族の今の姿が見えたのではないか。それは彼女にとって救いなのではないか。

きっと繋ぎ合わせようとすれば、いつでもできるのだろう。だが、彼女の罪の意識が遮っている。

もしかしたら、家族が再び揃えば星羅は笑ってくれるかもしれない。大輝は思う。彼女は不幸になってはいけない。

だとしたら、誰が彼女を幸福にできるのだろうか。笑わせられるのだろうか。たとえ、幸福になれたとしても彼女は《魔女》であることをやめないだろう。そんな彼女を誰が守れるのだろうか。やはり、一樹なのか。

「はい、手出して」

その声で待機は現実から離れていた意識を引き戻された。

つい先程まで深刻な表情をしていたかと思えば、にこにこ笑って睦月が促す。

当初の目的の手相を見るということだろうか。

「君、モテて大変でしょ？」

大輝の手を見て睦月は言う。その目は真剣そのものだ。

手相でどこまでわかるのか、大輝は不思議だった。大輝自身は星羅に見られたことがないのだが、彼女がどこまで、どんな風に見ているのかもわからない。

「星羅ちゃん、厄除けに効くからこのままキープキープ！」

「いや、でも……」

まさか彼女の実兄の口からそんなことを言われるとは思っていなかった。

「君、婚約者のな子とは結婚しないんだよね。そういう線じゃないもん」

「本当ですか!？」

大輝は思わず立ち上がってしまいそうだった。

何たる僥倖だろうか。信用できるのかなどわからないが、信用しないという選択肢が存在しなかった。全力で信じたい。

彼は徒花星羅の兄であって、同じように手を見ることで運命を見ることができのだろう。彼の目は星羅と同じ目をしている。

「うんうん、彼女との縁はノーノーよ。まあ、それ以上言っちゃうと全然おもしろくないから、お口にチャックしちゃうけど」

本当にチャックをするように睦月は右手を引き結んだ唇の上で動かした。

「おもしろくないって……」

「ただ何か……そう、なーんかやな感じ。君の恋は障害物競走みたい。近々、悪い奴が出てくるから気を付けなよ?」

希望が見えたところで、大輝の気分はズシツと重くなる。

「それって、俺の婚約者的な……」

「また別の何かあってくらしいしか言えないね。何かねー、モヤモヤなのー」

別の何か、それはそれで問題である。

一樹にも変な奴らが聞き回っていると言われたばかりだ。これ以上、面倒なことは起きないでほしいものだ。

けれど、もうどうすることもできないだろう。大輝は大会の中の流木の一本に過ぎない。ただ流されていく。それだけのことだ。

「俺、星羅ちゃんよりも全然劣るしー。いや、星羅ちゃんがどんな風に見えてるか俺にもわからないのよ。って言うか、星羅ちゃんが一族で一番なのね。ママ……本物のママも凄いんだけど、星羅ちゃんの方が上。もう死んじゃったおばあちゃんほどじゃないけどね。うん、まだその域じゃない」

星羅は祖父のことは話したが、確かに祖母のことは何も言わなかった。既に他界しているからだったのだろう。

「おばあさんも、占い師とかだったんですか?」

「うん、そうだよ。あの人は遠い海を渡ってきた魔女。マーガット
言うんだっただかな？ 星羅ちゃんみたいに猫ちゃん連れてたよ。何
か猫ちゃんが集まってた」

祖母も魔女だったというような話は一切聞いていなかった。異国
の血が入っていることも、それすらも彼女は話してくれなかった。

睦月と別れて大輝はまたとぼとぼと歩いた。いつもは自転車で行く道を歩くのがこれほど寂しいとは思わなかった。

敢えて言うならば、いつもは満たされていたのかもしれない。星羅と話せないことが胸に隙間を作るなどは考えてもいなかった。

下を向いて歩いていて、前方からの気配に顔を上げると男が二人立っている。スーツを着込んだ綺麗な身なりの男達である。

彼はぴたりと足を止め、大輝が避けていこうとするのを制した。

嫌な予感に大輝はビクリと肩を跳ね上げた。

「灰岡大輝君だね？」

問いかけられて、大輝は嫌な予感は当たったのだと確信する。

思わず後退るが、許されなかった。背後にももう一人いる。大輝の退路を塞ごうとしている。

一体、何なんだ。大輝の体は緊張で強張る。

「君のお友達の徒花星羅さんのことでお話聞かせてくれないかな？」

学校の周りで何事かを聞き回っているというのはこの男達のことなのだろうか。それも星羅のことを聞いてくるとは悪い予感しかない。

生憎、この通りには人気がなく、助けを求められそうにない。

「知りません」

毅然と大輝は答える。彼らに星羅のことを教えるつもりはない。

「最近の高校生は嘔吐きだな」

背後の男が笑う。

嘘と言われても仕方がないかもしれないが、大輝は星羅のことをほとんど知らない。それが事実だ。

「我々は既に君達の関係を知っているのだよ」

「話すことは何もありません」

彼らに何がわかると言うのだろうか。恋人ではなく『お友達』と

言った。偽装カップルであることを見抜かれたか、それとも子供だと思っっているのか。

どちらにしても不愉快だ。彼女のことならば大輝の方が知りたいぐらいであった。今最も知りたいことだ。

「敵ではない。私達は彼女の味方だ」

自分が彼女の敵だと言われている気がして大輝はムカムカしてくる。今、彼女を面倒なことに巻き込んでいるのは自分自身だとわかっているからこそ苛立つのだ。自分が彼女の味方などではないことを思い知らされるからこそ不愉快なのだ。

「我々はサイキック……彼女のような特殊な能力を持った人間を保護しようと考えているのだ」

大輝にはその言葉がピンとこなかった。星羅を超能力者や霊能力者などと思っただけではないからだ。彼女は《魔女》であって、それ以外ではない。

「彼女がそれを望むとでも？」

「なら、君は望まないのか？」

「望む必要がありますか？」

彼女を得体の知れない男達に渡したくない。それだけだった。

星羅にとって自分が利用者でしかないとしても取られたくないと思ってしまう。彼女に望んでほしくなかった。

「この世の中は彼女には生き難いと考えたことはないのか？」

「思いますよ。けれど、あなた方が彼女にとって生きやすい社会を実現できるとも思いませんから」

たとえば、一樹ならできらるだろう。いずれ、彼女はそうするつもりなのかもしれない。星羅が大輝から離れた時には。

だが、今日会ったばかりのこの男達を信じられるはずがない。

「君とは是非ゆっくり話し合いたいものだね」

話すことは何もない。けれど、腕を掴まれてどうしたらいいかわからなくなる。

「離してくださいー！」

振り払おうとしても、大人の男にはかなわない。それに相手は三人がかりだ。

誰か助けてくれ、そう強く思った瞬間だった。

「喝！」

鋭く放たれた声と共に、何かが飛んでくる。

「いてっ！」

「うぐっ！」

「ぐはっ！」

男達が三人とも額や後頭部を押さえる。

地面に落ちたのは十円玉大の白い固まりだった。落ちた衝撃か、一部粉となって崩れている。

「あたしの店の前で嗅ぎ回るなんていい度胸してるじゃないの」「ぐいっと腕を引かれ、気付けば目の前には着物姿、仁王立ちしているように思える。

「あたしが話を聞いてあげようじゃないの。いいえ、それは、元々あたしに聞くこと、効く相手を間違えたわね」

女物の着物を纏う後ろ姿は綺麗だが、声は太い。妙な予感が大輝の中を駆け巡る。

「さあ、誰からお話しましょうか」

大輝からその人物の表情は見えないが、男達が怯えている。そして、そのまま逃げるように去って行く。

「大丈夫？ 坊や」

くるりとその人が振り返る。綺麗な人だと大輝は思う。

背が高く、細身だが、広い肩幅がわかる。その声も声の低い女性だと言うには少し無理がある。

「まったく、嫌になっちゃうわ。お塩投げたくらいで懲りてくれるとも思えないから尚更だわ」

その人は大仰に肩を竦め、地面に落ちている塊を一つ踏み付けて引きずった。ガリガリと削れたそれはタブレット状の塩らしかった。

呆けていた大輝ははつとする。それから頭を下げる。

「あ、あの、ありがとうございました」

「あら、やだ、礼儀正しい坊や、ちよつと飲んでく？」

その人が指す先に店がある。バー エトワール、外観は落ち着いていて、いかがわしい店には見えない。

つまり、この人はママというものなのだろう。

そして、大輝は思い出す。睦月から聞いたことを。彼に会った後でまさかとは思うが、この人にも面影があるのだ。その言動も振り返れば一つの可能性を示している。

「あの、も、もしかして、徒花さんの、お、お父さん……ですか？」
迷った結果、お母さんと言うのは語弊がある気がした。

ビクビクする大輝を見て、その人は目を細める。般若の顔になるわけでもなく、穏やかな笑みが浮かべられている。

「そうよ。あたしは徒花^{たっけ}、真正正銘星羅ちゃんのパパよ。今はママなんだけどねー。おほほほほ！」

大輝はどういう反応をすればいいのか、わからなかった。けれど、皐は気にした風はない。

「嫌になっちゃうわよね、最近ああいう輩が増えてきてるのよ。保護なんてしてもらえないし、望んでもいないってのに」

星羅もそうなのだろうか。

「星羅ちゃんを頼んだわよ、坊や」

「灰岡大輝です」

坊やと言われるのは何だかくすぐつたくて名乗るが、皐は微笑む。妖艶な笑みに大輝は戸惑う。この人は男だ。星羅の父親だとわかっているのに、妙なドキドキが治まらない。

「知っているわ。でもね、まだ認めてあげない」

ニイツと吊り上がる唇に動悸が激しくなっていく。

見透かされていると思った。

「うちの娘、泣かせたら、ただじゃおかないから。さあ、あんたもお行き！」

覚悟してなさいよ、と臯が帯の中から塩のタブレットを取り出し、
手の上で軽く投げてみせる。

そうなると大輝はあの男達と同じように逃げるように去るしかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6212x/>

マーガ

2012年1月6日16時57分発行